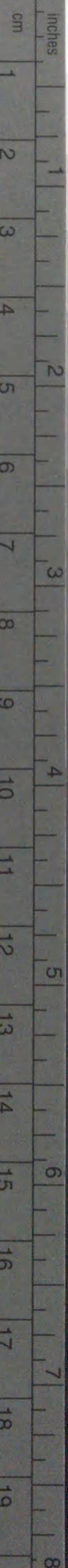


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

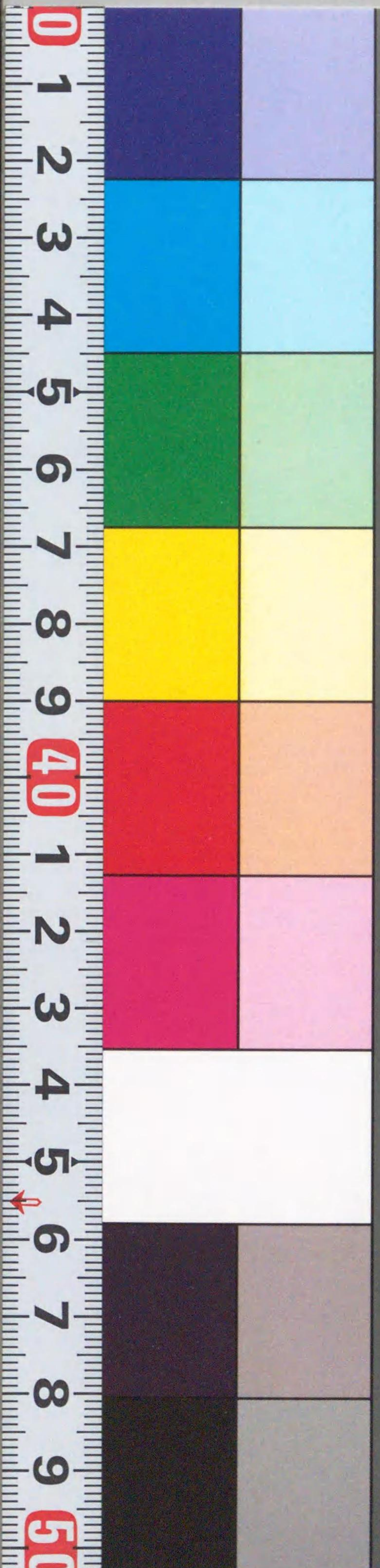
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



增補雅言集臨見

廿一

813.6  
I619g  
Nov



813.6  
I 619g  
Nwd



691337

増補雅言集覽卷之廿一

石<sup>下</sup>川<sup>心</sup>雅<sup>目</sup>望<sup>る</sup>集  
中<sup>下</sup>島<sup>廣</sup>足<sup>補</sup>

たり(梁塵)<sup>下</sup>催馬樂鷹子のまろよさうをらん手よをゑて粟津の原のまくるその

めぐりの鶉とらさんやさきさんたちや(同)<sup>下</sup>たり山は鷹をそあちあけておくぞか

とあそれおくをかみまき(金葉)<sup>上</sup>「のさむうつまうろの鷹のる袋よをさるもさゝ

でりへーつるうか(源 桐壺)<sup>上</sup>廿ひざりのつりさの御馬藏人所の鷹を

ゑて給り給ふ。荒鷹をやぶさそいさりとやたり夜さりをさり西行。たおれのさり

草取鷹おのぶの鷹おらふの鷹くろふの鷹いらこの鷹やりをの鷹<sup>以上</sup>

たが<sup>誰ガ</sup>(古)<sup>秋上</sup>「ぬいおらぬりこそよ不へは秋の野またがぬぎりけし藤袴をも

(同)<sup>戀</sup>「偽と思ふ物りら今さらまたがまことをりわれいたのまん(源 柳)<sup>五十</sup>をき

給へさぞと見侍らん(古)<sup>秋上</sup>「秋風は初雁がねぞ聞ゆるたが玉づさどかかて

きつらん(伊勢物)<sup>四十</sup>(新古)<sup>戀</sup>「出てこゝ路たよいまさかそらトをたがかよひち

と今いかるらん



たのい 他界(沙石)五ノ上 生所をりならせつぐべいとよくくくさかひに契りぬ一人  
他界して夢に告げていとく云々

たうい 高岩(夫)廿六(新六)三「入海のせとの崎なる高岩に白波こしてある、汐風  
為家

たかいひさ(平家)五ノ舟そこよ高いびさかいてぞ臥さりける  
廿三

さうさ 竹葉。堀川ノ(万)九ノ山跡庭聞往歟大我野之竹葉菫敷廬為跡者(堀太) 旅戀  
書入レ 九ノ

「立かへり駒の行かふ程ならバたかをかりしきひとねまーや(夫) 廿一千五  
百番顯昭 「い  
そがねよさかをかりあきあがむきバ吉野のたけに月かさふ泥ぬ

たかは 田川(夫)十七(新六)一「冬きてい田川よ立る水車氷のくさび打をへてけり  
為家

補 たかそかり(續後拾)物名 たかそかり。二條太皇太 「君の代よ千年とかねてをみさ  
かまかりにもあさのかねらうつらす 后宮大貳

たかそひ(榮)ゆふしで 廿おとゞ 顯消えいるさかりよてふ給へるに一の宮おひ  
四

まいておとゞや馬よせんとおまー奉らせ給へばわきよもあらせ起あがり給ひて  
たかそひいて馬よのせ奉り給ひてありかせ給へバ一の宮例よりいうでかぬ馬か  
とて御扇してとくくと打奉らせ給ふと女御とやり奉らせ給ひて目くる、こち  
せさせ給へば 賢卷廿一

たがへ 鴈(和名)十八 鴈和名多 貌似鴈而小背上有文(万)十六 「人あがせあらくも  
るいさりるるとたりべと舟の上よをむ 加閉

とがへ 与物 出所 出所  
たがふ

たがへる(堀太)鷹狩(夫)十一 匡房 「とりりる野中の木の志け、まば空とる鷹のさ  
がへりもせせ(夫) 十八、俊成 「おぞつりおたがへる鷹もいりからんかりバの小野の  
雪くれの空(袖中抄)云あひせやりたるたかの  
鷹かひの手にかへるをいふ

たがへま 耕(夫)廿七 土 御門院 「此頃の賤がさかへまからまきのうーと思ふもちあらの  
世や 田コカヘス 加 部 補(字鏡)稻耕也田 加戸須

補 たかとり 竹取(大和物)「さかとりがよ、にかさつ、とゞめけん君のきまよとこ  
よひーもゆく 冠注云竹取をたかとりといへる六百番哥合の判辭にも  
論せられたり今按に此ころの詞つかひにて別に儀なし

たかどの 高殿(万)十九 高殿乎高知座而(日本紀竟宴歌)時 「このどのよのぞりて見  
まば天の下よもよけふりて今ぞとみぬる

さかとき(夫)五 仲正 「朝霞またさかときもまちつけをさ、ろさちして鳴きまはか  
鷹時ふて鷹つかふ時といふか  
かはたれ時かとも人いへり

とらがき 高垣(夫)九 俊頼 「山がつのまこがたりまき枝もせよゆふがはなれりまかひ



をかひよ

たかのひ 鷹飼 (伊勢物) 百十四段行 おろさかの鷹のひよてさふらひせ給ひける 此ハ後撰

モ (拾遺) 物 「鷹がひのまごもこかくよつをぎ犬のをきていかんかくるまつを

(夫) 十八 「死むにたつたのふゆのえたかひひふもいくよりあせくらいつ

(源 藤のうらと) 廿藏人所のさりがひ

たかる (古事記) 上ノうト多加禮

補 かく (万) 十一、高山よたかへささりたりくまわがまつ君をまちいで

んかも (同) 十八、あをよよからある妹がたかくままつらんころをかよ

あらとの (同) 十三、高々よこむと待けむ云 (同) 十五、高々よつまもことよ (同) 十五、

「そけやい妻も子ども、たかくままつらん君やまかくれぬる (同) 十二、云々

さかくに妹かまつらん (同) 十八、もちの日よ出よ月のさかくよ君をいませ

て何をかおもせん (同) 十四、とよ國のさくのたろをまたかくに君まつよらひさ

よふけにけり

さかつき (延喜式) 廿掃部寮七多加須伎 (いせ物) 八十女方よりそのとるどたかつき

よもりてりそをおひて出さるかひよかける哥云々 (源柏木) 十御うぶや

をかひよの常のをしきついがさねさかつきなごの心をへも (枕) 九ノたかつきよまる

りたるおほと油をき髪筋をさかかくひるよりのせうよ見えてまをゆ

はれそ (源やどり木) 八十紫たんの高つき (うつろ 國讓) 七こたかつき (万) 十六、廿

高杯よもり机にたて、母にまつりつや

たかね 高根 (万) 三、田子の浦ゆ打出てこれ真白おぞ富士の高根よ雪の降れる

(詞花) 秋 天津風雲吹さらふ高根よているまでとつる秋のよの月 (新葉) 春下

「山のさよあさるる雲やみよの、さかねの花のさかりるらん (月清) 上 「浦風

よもかやちるらん志賀の山さねも沖もおささ波 (夫) 十九 「ひえのやまこの

ねおろのうれ雲よ雪ふさわたは志がのうらかと

補 たが名いた (續拾) 春下 「あざかりといひひなはとも櫻花さが名いた (トミ

ねのさるのせ

たのら 實 (江談抄) 三故帥大納言常談云隨身公家之寶也 (山家集) 下 「あこやとるる

のひのうらをつとおきてたりらのあとを見ざるかりけり (拾) 神樂 (神樂) 「四方山

の人の寶とるる弓を神のみまへよけ奉る (夫) 廿二 「さからと玉をいそは世

のさめに君をよさむるうつものなり (同) 同後 「あん世まで長き寶とるるもの



佛よつくるこがねかりなり(同)

同家集中原 師光朝臣

「大和にもまりの玉と草あぎのつる

ぎの國のたうらかりけり(拾玉)

四

「うきぞかゝみそぢのうへま二そへてこのらの

中に寶をぞみる(源わかぢ)

下ノ 卅九

いやしく貧しれものもこのき世よあらたまりさか

らよあづかり世よゆるさるゝたぐひおそかりけり

このらのいと

寶の池

「そちの咲寶の池よこぐ船のまづおもひけようかびぬ

るかぢ

たうらのこう

寶の

長者ノ心ナリ(うつほ吹上)下ノかみあびのさねまつといふ長者のぎ

りあきたからのこうにて(同 後蔭)

上ノ 卅九

たうらの王ぞとて此子をさへけてやゝあふ

(榮月の宴)

八故朱雀院の御寶ものい只此宮のそこそあんあき此宮の幸おとせる宮

かりさからのわうよかり給ひかんとそとて

たうらのうゑ木

寶の

續古(釋)夫(卅四)花の盛極樂と思ひや「あざにちる花見るとど

よもある物をたからのうゑ木おもひこそやま(如來神力品)衆寶樹下獅子座上諸佛

さからのくらる

寶の

夫(廿五)元輔家集「みや濱のいさでのこそあわが君の寶の位

かぞへ見んり

寶の

心也(好忠)四季戀雜きのふ見しさうらのやともけふの淺ぢか原と露

さからのやと

寶の

宿(好忠)の序云々

あけくて徳人福者ノ宿ノ心カ

さからのやま(智度論)

廿復次經中説信爲手如人有手入寶山中自在能取若無手不

能有所取云々無信亦如是入佛法寶山都無所得云々(平家物)

肝文 十三人の智徳おの

おのさうらの山に入て手を空しくかへり給ふ

さからのきみ

寶の

君(大事)思(落窪)二衛門が思ひりぎりの事をせさせ給へ

ばけよおまへよりさうらの君とかん思ひ奉るといふ(大鏡)七(四)猶がたからの君

におくき奉りやうよものかかしく思ひやらるゝ折こそ侍らね(榮花山)四十中納

言の守宮神のよま所の御前よてふしまろび給ひて我さうらの君のいづあよかあか

らめせさせ給へるぞやとふしまろびなき給ふ

たからのもの

寶物

源(うす雲)廿(い)もとよりのさから物え給ふべきつかさかうふり

(同 梅かえ)

八万よめづらかなるさうら物ども

たからか(落く)一北方いとうれしと思ひてきぬさからりよひきあけて落くぞよ

いまして(同)三(さ)をさうらよの給へ(狹)三(上)いとさからかよ打笑ひて

さうんな

タカウナ

神代紀(上)化成笥(詞花)雜上冷泉院へたうんか「世の中よふ



をる所

**補** **さかうかかさか** (雅亮装束抄) おとよあるあいたのおととれぐ一一枚かうが  
いさかう箒かかさかつかをのみよてつゝむべ一又さん種を二枚たゝをかからまきて  
そのうへよさうりうなりさをもとゆひく一二枚云々

**補** **たかのこ** (万代) 雑三よみ「たかの子のまろよたばらんでにそゑてあそづの原に  
鶉狩せん

**たりのこ** (堀次) 猿 俊頼 「さかのこいともあやいとまゝなり猿まろをいも引さ  
てゝとや

**たらく** **たかい** の所に  
出す

**たかくさ** (夫) 卅六 「さかり人をその夏野におゝろせよたかくさがくれれ木ふは  
為家

かり 高草 (同) 九後九條 「星見ゆる夏夕の鹿のかくろへてふとの裾野よまける高草  
内大臣

**たかやか** カケ (源 帯木) 卅 此香うせかん時に立より給へと高やういふ (狹) 卅上  
=同 高ラカ (源 帯木) 卅 此香うせかん時に立より給へと高やういふ (狹) 卅上

こゝまいとあやいさまきものありとたかやかといふに (同) 四ノ下四十八 いど死と  
兒ノサマチ

り奉るよ何心なく打ゑみつゝ物語たかやかよ給ふを (源 夕顔) 四十九 たかやかある  
八

荻よつけて (同 若菜) 下ノ 十七 いと白くをきたる荻と高やのよのざして **補** (同 柏木) 五九  
十七

とたかやかよ

**補** **このやま** 高山 (万) 廿ノ四 「たうやまのいそほよおふるまがのねのねもころぐ  
よふりおくちらゆき

**たかまがもら** 高間原 (神代紀) 上二神坐于高天原日云々 (夫) 卅 (御集) 鎌倉右 「八百  
七

万四方の神たち集まりたりまがもらよきたかくして

**さがふ** 違 (万) 二ノ 廿九 「あめつちとともをへんとおもひつゝつゝあへまつりいあゝろ  
廿九

たがひぬ (源 桐つや) 廿 その相さがふべ一といふ (夫) 卅四 久安百首 「契どまたがへ  
一

ざりせばわさつ海の底よも人や行かよいま (源 帯木) 十 ともかくもたがふべきふ  
四

あらんをのとやかよ見忍さんより外よまは事あるまどかりけりといひて (同 明  
石) 九

まよとに神のゑるいさがいせかん (同 若紫) 六 此おもひおきつるをくせさが  
六

い (同 帯木) 八 いりせもさかゝりけんと思ふよりたがへるおとなんあやうく心と  
八

まるごさあべき (同 橋姫) 卅七 ひとおもかく打出聞えさせてんさまをさがへ侍るま  
七

トくかん (枕) 四ノ 十八 扱どろくも御かへりのかくてをざるめるのそいをつゝとて給  
十八

へりいかばとりさがへたるよやといふよあやうのさがへ物や人のもとよさる物つ  
十八

つとておくる人やいある云々 (同) 五ノ 十四 されりあうぬひさりと知りてか直さん云  
十四



ぬひさがへの人のたよをさめ(万)<sup>十四</sup>「おそそやも汝をまよめむかつその  
権のまやてのあひのたがひト(源<sup>タカハ</sup>)<sup>九</sup>此世の人よのたがひて(大和物)一、  
る御ありきし給ふいとあしき事ありとて内より少將中將をどこれりまきふらへと  
て奉り給ひれまきとたがひつゝありき給ふ(宇治拾)<sup>五</sup>さりとして兄弟の中たがひ  
まつべきまあらせ(同)<sup>五</sup>故殿のおのましゝにたがせおのまさぬがあされ  
よおぞえて(補<sup>金</sup>)<sup>右大臣</sup>別堀川「りへるべき旅のわかきとあぐさむるこゝろにたがふ涙  
ありけり(新古)<sup>神祇攝政</sup>太政大臣「神風やともをそ川のそのかまよちぎりしことの末をた  
がふか(著聞)<sup>九</sup>法師のたがひさるひまをうかゞひて夜ふれてかの堀のいさへ車を  
よせけま(同)<sup>十六</sup>けふたがもて祇候をべきよおぞせふくめられたりなるに  
(同)<sup>十六</sup>今たがひ候てひとりも候のせ云々折ふしわかものどもをかたがひ候て  
(同)<sup>五</sup>三藏人五位たがひて人も候ぬと申て此侍まゐりさるよ  
附たがひめ(源<sup>わか紫</sup>)<sup>卅</sup>その中にたがひめありてつゝませ給ふべき事をん侍る  
といふよ(同<sup>繪合</sup>)<sup>三</sup>あゝるたがひめのあるといかよおぞせらん(同<sup>わかな</sup>)<sup>十一</sup>九物  
のたがひめありて

さかさ 次ノ高シ たりき たるきひと 類

さかさ(散木)<sup>下ノ五</sup>。たかさいいふ物きたる男のこ「たかさきて畑よかよふ翁哉  
高笠カ又田 笠ナルベシ

たりき(奥儀抄)三(後撰)春「山もりのいそぐいそかん高砂のをのへの櫻を  
りてのざん<sup>是ハ播磨の高砂にハあらず山の一名</sup>(後撰)夏<sup>兼輔</sup>「みとあよの更ぬく

まゝに高さでの岑の松風ふくかどぞきく(催馬)<sup>二段</sup>「高砂のさいさでのたかさこ  
のをのへよさてるあら玉をら玉つさき云々(舌)<sup>秋上</sup>「秋萩のをささきよけり高砂

の尾上の鹿の今やかくらん(後撰)戀<sup>六</sup>扇にたかさこのかたかさ「さをーかの妻を  
さ戀をさりさでの尾上の小松さゝもいそかんかへ「さをーかの聲さりさでよ聞え

しつつかさき時のねよあそありぬき<sup>案スルニ櫻をみよる高砂の浦といふを清輔朝</sup>  
たり<sup>〇いづれも山をいへり〇播州</sup>る<sup>補</sup>廣<sup>足</sup>云<sup>貫</sup>之<sup>の</sup>哥<sup>に</sup>高<sup>砂</sup>(貫<sup>之</sup>)「高砂の峯の

松とや世中をまもる人とや我のかりかん

高砂のをのへ(松の落葉)山の峯を高砂の尾上といふのそりまの地名よ高砂の

尾のへといふありて名高けまば山の尾のへのまくら詞のやうに高砂といへるよ  
て津の國のまよおもそき石のかよふるとも雨よあといへるたぐひかりさるを後  
撰集に兼輔のみトか夜のふけぬくまゝ高砂のそねの松風ふくかどぞきくとよめ



るはやく心えあやまりてよめるかりとねまの高砂といふべきよか一砂のつも  
りて高くありてといふ舊説のいとくつさかきから高砂の山とこそ言べし  
(北邊隨筆)しのぶすゝちのくねの冠におかきたるまてもちせりといふまで  
よかゝれる事よのあらせとあるべし地名をうりふり用ゐる類ハ「高砂の尾上  
あれかり播磨國高砂といふ所ありてそこよとのへといふ所あるがゆゑに高砂のと  
いおきたるまておろかこの山のをのへをばなへて高砂のとのへとよみつゑる同  
し例也高砂の山のおろ名ありおといふのふせりを陸奥よりいづといへるよ同  
日の論なるべし

補 高砂播磨 (散木) 又の日高砂まかりて船よりおりてままに心をくさめ

けるよ名よきこゆる松のいづれぞとつねはきばかれて久しく成ぬといふをき  
て(同) 田上よもべりける頃山のあひに人あまた物ひく音のいけるをとまそれハ山  
よりふねつくりてくごせかりといふをきて「山彦ハこのものれもよまへつゝ  
おとさるさで舟くごせかり(古) 序高砂住の江のまつもあひおひのやうよおぞえ  
(同) 雜上 「誰をかもある人よせん高砂の松もむかしの友からかくよ」「あくつゝ世  
とやつくさん高砂のをのへにさてる松からかくよ(拾) 雜賀 「我のこやこもたるてへ

ハ高砂のをのへにさてる松もよもより

たりきにうつる(貫之集) 下七 「あち風よ氷とねあハ鶯のさかきにうつる聲とつた

かん(詩小雅) 伐木篇 伐木丁丁鳥鳴嚶々出自幽谷遷于喬木

補 枕 (八ノ二十餘人をりりをかよゆきてまよりよりさりきやよのぞり

さるぞあれより見あぐれば

九かみくら 高御座 (續後紀) 十九 興福寺法師等奉賀天皇四十長歌天津日嗣 高御座

萬世鎮 布 五八能 春 爾有氣利 云々 (内匠寮式) 一凡年元正前一日宮人率木工長上雜工

等裝飾大極殿高御座 注 蓋作八角角別上立小鳳像下懸以玉幡每面懸鏡三面當頂著大

鏡一面蓋上立大鳳像九隻鏡二十面 云々 即位朝賀蕃客拜朝等時飾ルヲナリトゾ(夫)

廿一入道前 「さかみくらくものこもりせりくとのぞるこまののかひもある哉

太政大臣 (万) 十八 多可美久良あまの日嗣と天の下をらしめけるをめるぎの神のここの

畏こくもはため給ひて云々 (續紀) 十五 恭仁宮高御座 并大楯(三代實錄) 三ノ此天日

嗣高座之業乎(万) 十八 高御座あまのひつぎとをめるぎのかまのこまとの死こしめ

を國のまをらよ

補 さかき (古) 雜下よみ 「さかきそぎゆふつれ鳥りから衣たつたの山よどりそ







たがひ たがひめ 共に たがふ の所に 出す

たかせ 高瀬(源橋姫)注さかせの高き瀬也淺くて船のこたがた所かり此高き瀬

をこさん料舟の底を淺くひらめ作りさるもの也これ高瀬舟とい舟の名也今

の舟大きかるをさしていふなる高脊の心よや(三代實錄)四十元慶八年九月十六

日癸酉令近江丹波兩國各造高瀬船三艘其二艘長三丈一尺廣五尺云々(山槐記)十治

承四年八月十三日乘高瀬舟差廻登堤上望見南海伴舟乾田四郎則久所沙汰進也(源

橋姫)廿九「橋姫の心とくみて高瀬さば竿の雫袖ぞぬれぬる(夫)廿四權僧「むつ

田川岸の柳のみなき竿をりく波高瀬さそかり(同)廿四伊勢家集「とよ野の山も高

瀬のあさあらしいもせの河も波高く見ゆ(同)廿三登連法師「難波津よくどはたかせのこ

を掉まいくさびたちぬかものむら鳥(玉葉)旅修行侍るとてさかせ舟よのりて

よと侍りたる行尊「いづくともさしてもゆきさるせ船さき世の中をいでいさか

りぞ(散木)下廿七「世の中をうらとてすぐるたりせ船こゑ打をへてかららおそかり

(夫)廿三久安百首季通朝臣「さをの長さそかせめをたかせふね都へむきいさせるもならむ

(同)同崇徳院「さかせふねかふりさてよ大井川さの紅葉といかそぐへま(同)五

久四年(堀次)「たかせ船のなる堀江の水をあさ草がくまにて蛙かくかり(新

顯仲卿

古)夏寂蓮「うかひ舟高せさよあはれとされやむすほれゆくかゞり火の影(同)秋下

「あけのやのせの波の高瀬船下はか人の袖の秋きり(赤染)大井舟のこぎわ

たるをこて「あめやまぬけをわたるさかせ船をちかた人のくるりとぞまつ

竹簀(堀初)(夫)廿(散木)中廿四遇

不逢戀

山賤のあやにかけるとかそがき

ふりにくとも思ひけるか

堀川すがさ竹よてまをらかれバそきまありてそひ

よらぬ物かればかり(補)月詣五月雨

大納言實國

五月雨まぶれ一のやのたりはが死ふ

いどあろまで水ひきまけり(後鳥羽院御集)

「ふいそぶるまづのまろやのたかを垣

よはから秋のあろもうつかり(月詣)六皇嘉門

院武藏

「あふこといまばらよあめるさか

がきたえまがちかる流れかりとぞ

たかをか(夫)廿五(新六)三

須磨明石浦の見渡し近きとあゆとくるさきたか

をかをか

さよせ(夫)廿四家

「たよせとい思はざらんわさつ海よいのる心神ぞするらん

集惠慶

同廿一

家の森のもとの錦たてかからまのさよせまぬさ奉る(同)十一久安

左大臣家

「忍びかねつみあらざるを女郎花たよせに折とおもひうとむか(同)廿四

小大進

「白雲よいろ見えまがふとてぐらをたよせにうらよりこのこれか。此哥の障子

惠慶

會甫佳言集



の書に須磨の浦のかさ書さるゝ神の社に船よりゆくて波の高きをばさよせよとて  
ぐら奉る所をよめると云々(天武紀)六於朝明郡迹太川邊望拜天照大神

【さより】是ハツイデの心おのあらでユル(貫之)上ノ「青柳をたよりと思ひて春の日  
のみどりつもれる所ありけり(源蓬生)六おのが身よつけたるたよりとも思ひいで

てとまるまどうおもへるを(伊勢物)廿三年比ふるほどは女おやかくかりてたより  
かくかるまゝに(源みよつくし)六そこいあれた方よよりぬるの心とむむるさより

もかきものを(大和物)四京にのりて宮づかへをもせよ云々かくくいひちぎり  
てさよりの人よいひつぎて女の京よきよけり補(古)一「白浪のあとをきりたよ

く舟も風ぞさよりのいるべかりける(貫之)「草も木もあけき山べのくる人のたち  
よるのけのたより也けり(伊勢物)八十此男なまこやつのへけきばそれぞたより

よてあふのせけどもあつまりきよけり  
たよりツイデ也俗語にて(神のよき便の)イセ物のハツキ  
グヨリといへり。よき都合あり。ナキこゝろ也 (貫之)上ノ(六帖)二「わ

り菜つむ春のたよりよ年ふれば老つむをわびかりけき(貫之)上ノ「あさら  
しき年のさよりに玉銚の道まどひをる君かと思ふ(拾)春(貫)上ノ(六)「梅がえ

よふりかゝりてぞ白雪のそかのたよりよどらるべらある(貫)上ノ(風雅)一「よそ

よての花のたよりと見えながら心の内よ心あるものを(貫)上ノ(風雅)上ノ「久か  
の月のさよりよくる人のいさらぬ所あらとぞ思ふ(元真)八「霞さつ野べのさか  
なをけふよりぞ松のさよりよ千代いつむべき(御堂關白集)「そねかれ花のえお  
れど鶯の聲をも風のさよりとぞきく(貫之)上ノ「ゆふとまきかけたるゆふれさよ  
りに人よ心をおかけつゝぞ思ふ(源帚木)九いと久くまからざりし物のさより  
よ立よりて侍まば(同 若紫)四十をさかき人の御とのこもりてあんなさういと夜ふ  
かうの出させ給へるとものゝさよりと思ひていふ(同 さかき)五十此ついでよさる  
べき事ともかまへ出んによれさよりありとおぞめくらをべ(うつろ 國讓)おと  
のついでにあひ給ふ一日の覚えぬさよりありをかんめづらさき心ちせられの  
後の御かへり文の詞

バ(同)けふいたよりのやうあり(大和物)三いづこの大將云々外よて酒をぞ参り酔  
て夜いたくふけてゆくりもなく物給へりおと驚き給ひていづおよ物給へる  
さよりよかあらん(詞花)上ノ「たえよける男の五月をかりし思ひのけきまうで来りけ  
きバ「たが里よかたらひかねて郭公のへる山路のさよりあるらん(源 夕かほ)五十  
あれたりし所よをみけん物のこれよ見いれさりけんさよりよらくかりぬる事とお  
ぞいづるよものゝくかん(拾)別 兼盛 「たよりあらばいりて都へつややらんけふ



白河の關のこえぬと(うつほ 吹上) 一此あたりにさよりあらばおそしませ給へお

不ん馬かどやせめさせ奉らん(伊勢物) 六 十いひいでんさよりあさにまことならぬ

夢がさりせ(源 若菜) 上 十九おのづからたよりまつけてもらい聞いめさるる事もあ

らバ(同 玉葛) 六たよりまつけつ、けしきさ(同 手習) 廿横川まかよふ道のさより

まよせて中將こゝまおそしたり(後拾) 冬隆經朝臣甲斐守まつて侍りける時さより

つれてつかひける 紀伊(源 胡蝶) 十花蝶につけさるさよりこと心ねさうもてお

いたる中々心さつやうまあり(狹) 二 下 五十五「うたふねのたよりまゆかんわさつと

のそことどしへよあとのちら浪(うつほ 俊隆) 四 五十物のたよりに立よりて(源 夕顔)

廿「ゆふ露まひもどく花の玉銚のたよりまえいえまおそありけ(同 末摘) 三風

のたよりある時(同 紅梅) 十風のたよりをそぐさま(同 椎 か本) 五のるた

よりをそぐさ(同) 七「かざしをる花のたよりま山がつかねを過ぬるるの旅

人補(金) 別 國信 「けふのさのちわかるともたよりあらばありやか(同) のささけわ

そる(新古) 戀二 惟 明親王 「あふことのむかき空のうき雲の身をける雨のたよりかり

け(尾張の家苞)に云便のその縁まつといふ事どの事也(新古) 戀四 秀能 「思ひいる深

さこゝろのたよりまみいのそれともかき山路り(美濃家苞)「心の便とい我お

もひ入さる深き心のほざいたとふべきものもなきと此と山の深きまとい我心の程

をたどふべきさよりとまでかねていといふ心まつて分入て見れば此山路も

さらに我心の深きまとい及もせさ(もかき事よといふ意也)さよりまでとい便とまで

の意まつてまでいそれほどよまで深き山路とといふ意かり(李花)「誰のいと思

ふものからふる郷のたよりまたる、初かりのこゑ「ふるさとのたよりうれいと待

えても問べき人やかく雁のこゑ

補 九よら(万) 十四 七「あかりのとひのかふちまいづる湯のよまもたよらにある

かいとかくよ〇宣長云タヨラタユラニ絶の意よあらせして俗言よ丈夫ニといふ

意かり上よりのつゞきの湯のシャウブよ多き意哥の意のアヤフカラズシャウブよ

タシカナル意也妹ガシヤウブよいとぬとあやぶめるかり

た 是のみ(源 桐壺) 十人の心をまごさる事(あらとと思をた)此人故にてあまた

さるまどき人のうらををひいてて(云々外デハ) ナ 八 大保 平 多 他 仁 郷

止能味波 不念(源 夕かほ) 四 せ け か き 身 か れ せ て た く 思 ひ 給 へ つ る 事 の さ ま か く お ま へ ま さ ふ ら ひ 御 ら ん せ ら る 事 の か そ り 侍 り か ん 事 を 口 を く 思 た ま へ さ ゆ た ひ か と 外 デ ハ (同) 十 さ わ き さ ち と お ら せ で 物 を い ふ わ か き お も ど の



侍るを(源 帚木)卅 いらへに何とかのいもれ侍らんたゞうけ給たりぬとて立出侍る

外ノコ(朝忠)卅(續千)下 世の中いたゞけふのことおもふえてあそれむかへり

かりも行かか(伊勢物)七十 此石聞より見るの増まりあれと只奉るのすゞろ

かるべいとて人々よ哥よませ給ふコレノミ何(拾玉)五 うち山ともの、哀をおも

ふよのいそも高ねもたゞ松の風(新古) 雑中攝政 人をまぬ不破の關の板びさあ

れに後いたゞ秋の風 太政大臣

たゞ(俗にワツカ)源桐壺 六 日々おもりたまひてたゞ五六日の布とまいとよこら

かまば 常ノ常ノ事ノ人ノ心也(伊勢物)六 またいとこかうて後のたゞまおの

しける時とや 后ニモナラ(大和物)六云々 更よ少將かりけをと思ひてたゞよもか

らひ一中かりけをば 何コナキヲ

たゞ(六帖)上 君がさめ出ておざり一月たゞもいらせのたゞにかへる

物かハ入ラテ逢ズニ(新古)戀三 九のめぬよ君くやとまつよひのまのふけゆり

たゞ(源 若紫)八 惟光をかり御

供よてのぞき給へばたゞこの西おもてにしも持佛を奉りて行ふ尼なりけを

西ノ心(平家物)廿八 たゞ是より八島へ参りて人々に申さんるのよお 是モツカハ

ナリ(枕)六ノ 初瀬 たゞみおをろよとておくと見ればたゞ局

ニノ心也スグサマノ心(枕)十九ノ 所

よ出て犬ふせぎよををさらしくとかくるさまなを云々(万)六ノ 直起のこれ道

よしておしててるやあよそのろみとあづけねらしも(源 横笛)四 いたうつくしうらう

とをかる御ひたひ髪頭つれのをかきさたゞ兒のやうよ見え給ひて

たゞ(源 少女)卅(遍昭)ノハ外デハナイト(重之)八 音もせで谷隠をな

る山吹のたゞ口おのの色よぞありける(六帖)六ノ(朗詠)「やうきとも草のもえか

ん春日野をたゞ春のひよまのせとらん(蜻蛉日記)一 たゞむ月よと思ふをさまが

よ心よまかせねばらうとて九月よ思ひたつ(遍昭)十 詞云々 誰からんとて云々

哥云々といへるかへりことたかりを歌云々といへるたゞ少將かりけを(源 少女)卅

めでたくと物のおとめの六位すくせよとつおやくもその聞ゆたゞ此屏風のう

ろよたゞねきてあけくかりけを(同)八 卅 ちやまらたてをひふりさりたゞかの人の

御不ぞと見えて(六帖)四(伊勢集)「一枝の菊をるうらよあら玉の千とせのたゞよ

へぬべかりけを 是ハ不用意常ノマ、



此ツバハヒタフルニトイフ心ニテ俗言ニ(新古)戀二「さえねさむ志のおれ山の峯の雲りゝるあゝろの跡もあきまで(同)同俊成「うき身をばわきさよいとふいとへさむをさよおをト心と思せん(補)(新古)戀三「さむこのめたとへば人のいつをりをりさねてこそい又もうらとめ

さむに(万)四ノ五「わきもこがれたこの衣下よきて直あふまでいこれぬがめやも(古事記)下ノ道とへば多陀邇波能良受當藝麻知袁能流(景行紀)十尾張よ多陀邇霧伽幣流云々。直ナホ人ノナホ(補)(玉葉)戀五「そのよと、いとぬかよとのさびさ

いさむよたもとのぬるゝかりを

○たぐある さむの笛 さむ人 たぐ事 只あり 只さま

皆別ニ出ス

是ハ次ノ詞ニツケテ(源東屋)八守よのくそくも見えあらぬものかりけを

たぐいきに守のゐりける前よいて(枕)八ノ九稻荷いさゝかくる一々もかくお

くれてくと見えさるものどもたぐゆきよさだちてまうづるいどうらやま

(源タきり)廿たぐいひにいひをきて(落くほ)四越前守只そらたちにそらたち

(同)同たぐそらたちよそらたち給ふこそ物おもふりひかけれ(同)十一かせいさむ

そやよかるまゝいはいかよせまと思ふよ(源のわき)七さむをいかにわあゝき給

ふ(枕)七ノあまた花のよとよさむよりよよりて引さふとりて(同)あけまき)九た

むよこりよかんよとらせ給ふめを(同)ととめ)卅顔もよとけ給ひでさむか死よの

みかき給ふ(狭)四十四たぐか死よのとをかきまさる(枕)五ノ雨ふりてりともおさる

おとろしうかりさむバ物も覚え只おろしよおろはまきの御さうしハ部をぞと

うしよ参りわさしまどひしほどよ(同)九ノ御せんども只おりよおりてさてる車ど

もを只のよのけさせて(源總角)四十さむくれよくれよけてふけよける夜なれば(宇

治拾)八ノ日たぐよくきてくらくなりぬま(源柏木)卅九涙さむふりよふりおち

てえとむめ給ひ(枕)十二風いたうふきうこのおもてのさむあれよあしうあるよ

(源うき舟)十夜いさむあはよあく(同)若菜)下六さむあけにあはゆくよ心あさたむ

いきて(落くほ)一三の君の方よたぐめしよめし出つ(枕)五ノ廿二まめやうよふま

バ笠あきをのこどもたぐ引よひきいれつ(同)七ノさむせめよせめ申てうらまきこ

えて(同)十四面白き萩をよきかどと植て見るやとよ長びつもの鋤かど引さ

びてさむほりよりていぬるこそさびしうねたのりけれ

たぐいま 唯今(源桐壺)卅たぐ今のさかき御やとよ罪なくおせりて(枕)八ノ九稻

荷詣ノ所

十三

會補佳言集

卷之十一

十三



ニとゞかる所よての目もとまるまどき事のりれが身は只今からをやと覺え一か是  
タツタ今ノ心コテ桐ッボノ(源東屋)九せちみそ一り申人くあまた侍るかれバ只  
ヨリハ心キビシキヤウナリ  
今覺一煩ひてあん 此東ヤノ今モシハ未來(補)枕一十二此おきをまろうちてうトてい  
ぬ島につかませとゞいまとおらせらるれば

附補 しまたゞいま(うつは梅の花笠)八いまとゞいまとてうちにまわりぬ(同 藏開)

廿三みたりこゝちのをやましくて侍まばうちやをきてあんいまとゞ今をかたよまる  
りてときこえ給ひて

とゞいしき(源みとつくし)廿いつくしきかんどから。岷本ニ河海 九とゞいしきか  
んたからリテ糺ダ、ハシ 嚴重也(ト記)

たゞよしもおのたまトキ(タマニオア)タマナラヌ(出所へ)

たゞへでと(神祇式)八ノ稱辭竟奉。此詞中つ世の(書にハ見え)

たゞち 直道。道路ノスグナルチ(字鏡)徑徑同太々知(和名)十五 徑路(和名)多々知 徑逕也

歩道也(後撰)二「たゞちとものたのまざらん身はちりき衣の關もありといふあり

(興風)二あかむして過行春をたゞちあらバことしをかりの秋とよかあん(夫)廿六  
部式「こえくれバたゞちかりけを櫻井と名のとぞ高沢所ありぬる(同)十三「見るも  
仲實

をいたゞちよたてる秋萩をまぜれせさる露のながらと(同)三 信覺 「青柳のかつら  
の里の深とどりみちのたゞちよ春風ぞふく(同)卅三戀哥 「夢かさの浪のたゞちよ  
行舟のたよりよつねよの一聲(古)二戀 「戀とびてうちぬる中よ行かよふめめ  
たゞちのうつゝからかん(貫之)廿三(六帖)六 「たゞちよて君がこひ(六)んか  
つたたこゝせ外よて(六風を)うつろひぬべ(万)十一 「月夜よといもにあそん  
ととゞちからわきぬくれともよぞふれよける(彌)拾玉)六 「梅がえのよをひうれ  
きたゞちかか木とよ花の雪のあは卒の

たゞり 糸ヲクルワクノ下也方ナル居木ニ柱一ツ立テウ(令集解)二多々利トイヘリ  
此二説(万葉略解)。(神祇式)四金銅(利)多々(万)十六 「とどめらがうとをのたゞりう

ちをかほうむ時あしに戀わたるかも(源總角)初むそびあたるたゞりのまどまの  
つまより木丁のそころびよを記て見えければ(六帖)五ノ 「さちま糸のとれ共あそ

ぬ思ひをバ何のたゞをよつてそらへん。契云 此哥絡梁は崇をかねたり(令義解)

線柱(和名)十四 絡梁漢語抄云多々理云々(古事記)下ノ 太陀理(神祇式)一風神祭二

座云々多々利一枚麻笥一合加世比一枚已上三物並金塗(延喜式)八ノ十一 竜金能揣

契云(和名)一極ノ字タ、リカタトヨメリモシ揣ヲ誤リテ極ニ作テ假名ニカケルカ



崇ノ所ニ 崇出ス

崇古といひし讀拾「いそのかきふりにしこひの神さびてたゝるよわ

きいそね拾かねつる金葉秋散木上六「あらしをやそもりの神もさゝ

るらん月にもそちの手むけしつれ金まて後撰二大和物二「あらそのも

り此神のましけるをあらでぞをりたゝりかさる夫卅六道のべまたゝりか

そかどみそぎして關もる神よぬさ奉る重之十ちもやふるいつの宮の神の駒

めめかのりをやたゝりもぞをる後拾雜四赤五舉周云々いとおもく煩ひ侍りけるを

住吉のたゝりあといふ人侍りければ宇治拾四物のなよつきていふやうおのれ

いたゝその物のけよても侍らせうかれてまかり通りつる狐あり

たゞる爛新猿樂記雖牛頭爛一日無休源わかあ下目ぞさへのでひたゞらして

補たゝる賀陽院歌合長元「あよゝゝるさつきのやともかりけを澤のはさるの

まがふひかりよ千五百番歌合前權僧「春霞さゝるいとやこさてもあや山のおく

に雪やふるらん玉葉和泉式部「あひよあひて物おもふ春のかひもな花も霞もめ

よしたゝれを廣足云名だゝるといふ詞もこれとおなじき也只顔けはひせぬ瀆松四年比御行ひにやつして給ひてつくろふ所

か死御さゞかすのめづらさう

さゝりふ戰神武紀四いゆきまもらひ多々介陪磨竹取末かくや姫をえさゝかひ

とゝめせかりぬるとあまゝと奏いねしかみのたゝかひゝたる所として夫

廿六家一うつあみよとちくる沙のたゝかふせたてが崎といふよぞ有なる集庵主

補たゞか万十七四長歌そしけやゝきとがたゞかをまさけくもありさもとほり

同九われいぞあふる妹か直香仁同四十六ノ十三タカマサカ異ナルヲ玉勝

たゞよふ漂雲舟波又八ノ神武紀四卒遇暴風皇舟漂蕩遊仙窟汎々神代紀上

洲壤浮漂云々古事記上多陀用弊流推古紀四河水漂蕩滿千宮殿源夕顔五此

そとまでいたゞよふなるといづきの道よさざまりておもむくらん同あかし二思

ひがれぬ世界にさゞよふも後拾雜一岸遠み拾本たゞよふ浪の中空よよる方も

あきあけきとぞせし散木上九白雲のこねこは風たゞよふと思へ谷花ぞち

りける万十八「秋風のふ死さゞよそはあら雲いたをたづめのあまつひれかも

ぬべくぞおぢめる同常夏五いかける手のその筋とも見えさゞよひたるか死さ

まもしもトあがよ同竹川卅ふむそらもかうさゞよひありきて同てあらひ四十



さゝかある世よりらとをとゞめてさゞよひありたしとどよ(同)上ノ打をて、ん後  
の世よさゞよひささらへんこといとうしるめさく(同)桐つ(同)廿無品親王の夕さく  
のよせあきにていたゞよとさど

附たゞよと(源わかかな)下五たゞ御うしるをかくてさゞよとくおとしまさんよ  
り(同)同七十七紫の病後ノ色ひきをま白くうつくし夕まきたるやうよ見ゆる

御もどつきなと世まかくらうたけかりぬけさる虫のからかどのやうよまどいと  
さゞよとけよおとれ(同)同八こゝまのけしうのあらむとえ給ふをまたいとたゞ  
よと夕かりしを見てさるやうよ思ゆる、も今更にいとすくかん

たゞく(宇治拾)三その女とうあやまちせんからは出家をべきやうやあると思  
ふ心つきてさゞく(ととより出られり)

たゞか(禮記)委(方)十一たゞかをる青垣山の(方)の山祭の使の冠ニ(うつ  
祭の使)卅六季房ガううふりた、おそりつるさこのきぬやれくづれたうづや

れて(瀆松)七ふし給へる傍よ髪ぞいとちさくた、なそりたる(同)四ノ傍よた  
さおそりさる髪かき出給へまばいたゞきよりをゑまでおくれさる筋かく(狭)上ノ

廿をそのやがてうしるとひとしうひかきいきてこちたうさ、おそりたるすそのそ

きをゑいくとせを限りにおひゆかんととらん(うつは 藏開)上ノ御ぐし御もにそこ  
しさらぬとにてやうしかけたるをとして白き御ぞよひまかくゆりけられさり

よれさり裳よ打さ、なそれさるいとめでたし(枕)廿六髪打さ、おそりてゆら  
らゝかるそと長さおしそかられさる(狭)上ノ御くしをかりぞちさ夕まさ、

おそりていと所せ夕なり(同)御くし行末もしらむつや、とた、おそり行て  
さかくもておし聞ぬな、その給ひせつるもいとわづらひしうたゞあるよりひか、

る御をきでとも思ひ出らむ侍りつるなどいひて(枕)廿一たゞあるよりひせか、と  
とるそとふル男車ノ引わかる、所よて男、「とねよわりる、といひさるもをか、

(源わかし)十都の人もさゞあるよりひいひしよさぐふとおおさんも心そづか、しう  
おぞさるれば

さゞからせ(源わかし)十九たゞからせしきよしづきてかどぞありたる(同)若紫七  
そこのとるめ物むつかしうかどの給ひてさゞからせおもすし(同)うけせみ)

初よきそどにりくてとぢめんと思ふものあらさゞからせおがめがちかり(同)九  
御としのでよりひをか、しうもおとせべきかおとたゞからせ(枕)五ノ小兵衛とい



ふが赤紐とけさるせこれをもむせやといへば實方の中將よりてつくらふよさ  
ならせ哥云々(同)六ノ宮づかへの人などをかたらひてさよもあらせがりさるあ  
りさまかともあらでやとぬるよ(枕)五ノハケサ(同)六ノハ孕メルチイフ管常一  
リナリ(拾)別赤染「せーむともかき物ぬるまらむがのこさりと聞きたるからぬ  
哉(大和物)三「おろそらもたゞからぬかかとな月われのとまたまらるとおも  
へバ(源末摘)七いづちあらんとさよからでわれも行方あれとあとよつきてうら  
ひたり(同あかし)卅さよからせりせめ給へるをいと哀ま打置がたく見給ひて  
とら(神代紀)上ノ四 踏躡此云多々羅(堀太)不會戀「とらたてふはばまがねも  
こく物を戀まるとせぬ人やなまある

たゝらめのそか(花鳥餘情)政事要略衛門府風俗哥云多々良女の花の如かいねり  
このむやけしむらさきこのむや(源末摘)卅たゝらめの花の色のこと(補)本草名醫  
七十八葦草別録曰生山澤如蒲黃葉如芥(大同類聚方)和名多々良比又多々良女又  
種之内云々(辛)字鏡(葦(雅亮裝束抄)さかるの秋よ春のあかふさつさかりよひとへかさ  
ねてたゝらべ色とてぞさる 廣足云此ひとへか いねりのひとへか  
たゝらに 令爛 たゞるの所に 出す

たゝむ 山岩石又波モイフ(夫木八ノモ波モヨセテ(夫)廿(新六)三「山をさまき  
びくたゝむ岩角一年へてされぬ瀧の糸かか(夫)卅四涌出「夏山の木蔭たまこそ  
をばいさど岩のたゝとのさととりいりよぞ(同)卅御集法性寺「九重よとめる玉の  
みそよりかさふく月のねりのゆるをか(同)十六「冬のをぬぎきて、行にいき  
せバ庭にぞたゝむ衣手のもり(同)十三家「月さゆるあゝのせとよ風ふはバ氷の  
上よたゝむちらかみ(拾玉)四「大井川波の外あるもみちをやとゝこのおせるよ  
さかるらん(源帶木)十「そくよのからぬ山のけいさ木おかく世をかれてさゝとをい  
(花鳥)雅兼卿記 金岡以墨疊山十五重廣高五重也(夫)八家集「時鳥をきとるる  
波のうへよあゑとゝとおく志賀の浦風(同)廿七袖「浪あらふ衣のうらの袖貝をを  
るひよ風のさゝとおくのか(源紅葉賀)廿ひきよせ給へる屏風のもとよよりてお  
こぞとたゝとよせて(同)うつ蟬三屏風もそいのたおしたゝまれさるよ(同)七風  
吹通せとてさゝとひろけてふは 左ヲタ、ミテ 右ヲヒロクル也 (古事談)三 脱袈裟衣等タ、ミテ其  
上ニ廳宣ヲ置テ(補)新拾(雑中)俊頼「大井川をいさかまく岩おちよたゝむいかさの過  
がたの世や

たゝむき(和名)三ノ太々無岐一云宇天(神紀)廿臂(古事記)上ノ斯路岐多陀牟岐



仁德紀五十うち一於朋泥ホ子子シ泥士漏能辭漏多娜武枳ロシノシロガムキ

たゝんつき來月トイム後撰三戀やんことかき事よりて遠き所にまかりてたゝん月を兼盛一

のりよかんまのりのへるべきといひてまりり下りて道よりつかへる拾兼盛

たゞうど只人の所に附す

さうがと江次第一ノ重明親王記云暫顧來路此事間申故二條殿被仰云若疑懷中

扇疊紙落有砂跡歟狹上二大將女二の宮よあひ給ひてたゝう紙落し給へる事あり

ソコニタ、ウ紙トモ又フ源夕かほ七御たさうがみよいたうあらぬさまよかきか

へ給ひて同さかさ三五たさうがみの手からひかさをさる御几帳のもとよおちた

りなり枕ニノミちの國かみのさう紙のはそやかあるが花かくれなるかきこ

よちひうつりたるも木丁のもとよちりぢひさる同八ノ内の御物忌ある日云々

たう紙よりきておこせたるを見ま文詞云々發心集八各扇たさう紙やうのそ

かむとあまねく心ざしなり補著聞十六ふところの中よてさう紙を文よつくり

て職人盡哥合「わをれめやき殿に染るたゝうのみをやかかり一人の手ざそり

詞御たゝうかきめせ色よくいてきて候ぞとよ大世の事山

附さゝんがみ後撰離さゝん紙よかきて

さゝの皆常ナミノコ又何々と名ツッベキ物枕九ノヒまたり顔碁を打よささかり

とあらでふくつけさの又おと所よかゞりありくよことかさより目もかくしてお

ちくひろひとりさるもうれいからトやそりかに打笑ひ只の勝よりのほありかあ

り同十八たゞの紙のいとちろう死よらなるよき筆をろきまきしみちれ國紙をさ

えつればうつぢ藏開卅二仲正笙サバの笛行政さゞの笛仲頼ひちりき同九下ノ式部卿

の宮さうの御笛右のおとゞたゞの御笛ひちりきふれ合せて是ハ横笛禁秘抄下六

所衣唐衣也結中但近代只衣結中着唐衣源少女十むりせの人々の四るんさゞ

の人のおとゞををせとめ奉りてせくつくり給ふ榮木綿四手三御めのとなどやらん

方かくかあしたゞの人をさの何ともあらぬをを枕九ノたゞの女房よてさふら

ふ人の御めのとよかりさる云々

さゞ衣別出す

たゝく門戸又手夫十七後京極「清水もる谷のとををもとちめて、氷をさゝく峯の松

風源うつせみ三りういさゞきのいりていりぬ同七此度の妻戸をさゞきてい

る拾戀三よみ「さゝくとて宿の妻戸をあはされば人もこぞゑのくひをりけり



(伊勢物)廿四 此戸あり給へとさゝきけれと(源 夕顔)廿七 手さゝけバ山彦のこさふる

いとうるさ(同)廿六 手を打さゝき給へバ(同 寄生)廿六 かういつまどかど打たゝ死こ

こづくらんこそうひくゝりるべとま(新後)夏 道因 「夏の夜はうさゝねあがらあり

かまいたゝくゝひかの音あかりせば(後拾)神祇 惠慶 「いかり山とつ玉垣打さゝきわ

がねぎとを神もこたへよ(源 帚木)四十 忍びて打さゝかせあどもせんよととを

れてをとて(古事記)十三 ちろきたゞむき曾陀多岐多々岐麻那賀理

さゝふ(堀太)春雨 國信 「ふりかゝる雫に花やたゝふらんうしろめたなきよと此雨りあ

(山家集)下 「遠く出ゝ心の水やさゝふらんをみゆくまゝふりくあるかあ(夫)廿四

衣笠内 「きよと川いづる湊よゝみみてバせかれてさゝふ浦の入海(万)十三 ち月

の多田波思けんと吾おもふことこのこと(行幸高陽院應制和歌序)四方の海を心

よまかせ給へる池の水をもたゝへめ給へるを御覽せさせんとて(山家)下 「世

中にまぬもよゝや秋の月よとれる水のさゝふさくりよ(同) 「よもをがらうらと

を袖にさゝふまば枕よあま此音ぞさあめる(同) 「志のびねの涙さゝふる袖のうら

よかづまをやとる秋のよれ月

さゝこと(古)序 たゞこと哥

たゞこと(竹取)十 詞うくや姫例も月とあそれがり給ひけまとも此比となりてハ只

事よも侍らざめりいみどくおぞいなく事あるべし

さゝあり ヌツクロハ(源 ことふ)さゝいへさる中び給へり一名でりこそさゝありよお

ろぞかあるかたはのみ見え給ひよま是人のありさまを見えり給ふまゝよいとさ

まようなよび。ウよとさうかとも心してもてつら給へま(源 夕霧)十九 ありは

あそつけ人たよねざめいぬべき空のこゝさと(無名草紙)詞づかひあともむけよ

さゝありよぞあむめる(紫日記)たゞありよもてあして(打オキニテ何

事モナキナリ) 補 さゝさ(万)十 多々佐よもかよも與巳佐も(孝徳紀)タマサヨユサと云訓あり

たゞさま(枕)五ノハ抄二 后宮ノ琵琶引テオハセシガ火影アラハナレバ引ヤミテダ

ダニモタセ玉フ也 俗ノタマ居ルトイフニ(同)九ノ常平地チアリクヤウニノ心也

(枕)十一とのあきたるがあらいなれば琵琶の御琴とさゞさまよもたせ給へり(同)

九ノ澤水もけいたゞいとあをく見えわたるよ上のつきかく草生をたりたるをさぐ

かがとさゞさまにゆけバ

たゞさぬ さゞのさぬ 巴あ。是ハ唐衣ニムカハ。此アテ宮ノハ猶アゲマキ(空穂あ

て宮)二からあやたゞさぬひとつませを皆あか色(源 あげまき)四十 いとおほくも



えとり集め給ひざりぬるよやあらんたゞかる衣あやかと志よのいれかく一つ、  
(細流)染モ子リモセザルナリ

**補**「たぐめ」(万)十二「まをかぐみ直目」君と見てバおそ命にむかふわがまひやまめ  
十五

(同)九ノ云々直目見けむいよへをとこ  
卅三

たぐみ(新猿樂記)其明朝天陰雨降云々或戴疊斃臥深泥或着筵落入堀川(釋氏要

覽)僧祇云若在道行得長疊中疊安衣囊中至本處當敷而坐(允恭紀)二和餓哆々彌由

瑛去等鳥許曾哆多彌等異絆梅和餓兔摩鳥由梅(万)十六其皮をたぐみさしてやへ

たぐみ(同)十一「たぐみもへたてあまかひかよひせバ道のーバくさおひざらま

しを(源すま)十九たぐみ所々ひきかへり(枕)二十六いとつやゝかある板のそち

かうあざやかあるさゝとひとひらりりめようちうきて(同)八ノいやゝなる物、

まおとのいづもむろのたぐみ(同)十九高らいべりの疊のむろ云々ひだひろ

て見きバ(同)廿二日さかりありてあかきぬれさる男の疊をもてきてこれといふ

云々とりいきたればことさらに御座といふ疊のさまてかうらいかといきよら

かり(今物語)朧月のいか候べきといひさりけきバ女房返事なくとりあへ

内より疊とおし出たりける(宇治拾)七ノたぐみ馬かま馬かときつきたりりく  
十四

おくる、のよきことかいかといひてやがてまんひき疊かどい死て 廣足云コレ馬コ

ハ薄ベリナ(同)九ノたぐみあつらかまきてくどものくひものうまうたて(清輔

尚齒會記)高麗さのたぐみ四帖紫さの疊三帖とて 考るにふるくたみ

り(清少納言)十九かうらいべりのたぐみのむろあをうまやかにへりの紋あざ

かまくろうちろう見えたる引ひろけて見きバ(榮もとのしづく)卅錦のそさうた

るおがたぐみ云々うせ給へり(同玉の臺)四それより北またぐみさうらうどか

さねて(同御裳着)九木丁よかい硯の箱火とりたぐみ迄のありかう給へる(うつ布

織開)中ノたぐみにこんたをまむらさきのうらつけてうらのよきさのそ

さ(枕)六ノ屏風云々たぐみかどちうとたておくとこれバ(十訓抄)十三おとの外

は經營してよれむろさみかどとりいたしてまきけ **補**(枕)三尺の御さちやう

ひとよろひをさしちがへてこあたのへたてにいてそのうろよいたぐみ一ひら

をかがさまよへりせしてかたの上よききて(和泉式部續集)とれくくる人疊あ

つうしきておきされといひたるよ「たまさかにとふのそがまかりよのみくれバ

よどのよくくものもか(宇治拾)廿九さゝとあつらうらうきて云々(同)二ノ女房

の局のたぐみととりよせてねまけり(狹)上ノちやうト口のたぐみよかりをめよど



よりふ給へりける

たゝと(和名)細螺之太後撰書入タ、ミハ海螺のちいさき物也(後撰)一鹽をかきと

爾本忠見集ニ搦ナカリケタ、ミアへてと侍りければ忠見「鹽といへばかくてもか

らき世中にいりよあへたるたゝみなるらん見トイフ(和名)十六、壺和名阿。考

(万葉)十六の哥を思へり鹽をかき夜あるべし(万葉)十六ノ廿九シタ、ミニ辛鹽をよ

める哥也

たゝみ又たゝとひろけさゝみよせおゝとまる類ノタ、ムの所へ

たゞい但うつ後蔭上ノ云々たゞい命の後女子のさめよけぢりき寶とからん物

を奉らんと給ひて(順)卅九判此をぞこのうさひづきもくいとよくいそせ

いへめりたゞい判ノ「秋もあらず床をつかき野べあがらうさひおはる露ぞその

なきとまきば萩もそこ負見ぬ(補)竹取おほせの事いともさふと但し此玉た

とやそく得とらトセ

たゞい正土佐日記此人國に必しもいひつりふ物にもあらせかりこれぞさゞい

きやうよてうまのそむけける(今物)廿當時たゞい七哥よとおおく聞ゆる中よ

いづきりまぐれ侍る云々

たゞびとナホ人ト同ツ平人常ノ人也ス神代紀下ノ殆タビトナラズ非常之人(源 桐壺)廿きもこ

とよかゝおくてたゞ人よいとあたらしけきとあたり給ひをば世のうたがひ

おひ給ひぬべく物給へば(同 若紫)八いとあやまらばよみるたる尼君と人

見え(伊勢物)三二條の後のまた帝にもつかうまつり給ひたゞうとよておそ

まゝける時の事也(源すま)十又いよへのたゞうとさまよおぞかへりてあよひ

いかるトゞいさやうよふと参り給へまば

たゞ糺枕九ノ「いかよいていかまらまいつそりをそら糺の神かりせ

バ(夫)五俊成「人の思ひ糺のもりのよぶことり心の關をそらにけるらん(源さかき)

九「國つ神をらよことこる物をらばあざりてをまづやたゞさん(新古)雜下車

の衣を出したりなるを檢非違使のた「大をらよてる日の色をいさめても天の下よ

ださんとしければ云々女職人内匠「たきのをむべきたかいへりなれば(馬内侍集)「いのりくる我の岡のちかごとを

おそくたゞの神よもあるのを

たゞ正たゞいよ出す

たゞ正たゞいよ出す

たゞ正たゞいよ出す



さゝせみありきたまひてと給ふ(同 わか紫)六さてさゝせみよるからんといひあへり(同)八鹿のたゝせみありくもめづらしくと給ふよあやましさもまぎれさてぬ  
 さゝせまひ(源 若紫)一山の櫻のまたさかりにて云々霞のさゝせまひもどかろうと  
 ゆき(同 薄雲)十例よさがる月日星の光見え雲れさゝせまひありとのと世の人  
 おどろくおとおそくて(同 さりつは)一冊もとの木どち山のたゝせまひ面白き所なる  
 を(同 柳)六庭のたゝせまひもたよえんなるあたにうねをりたるありさまあり(同 胡蝶)三とかか死石のさゝせまひもたゝ繪よのいたらんやうあり(同 帚木)十おそ  
 やけわさくさく人のたゝせまひよ死あさきあとの目よも耳よもとまるありさまと  
(同 あけまさ)三四十とこよのつねの人けちかく親せうとあといひつゝ人のさゝせ  
 まひをも見おれ給へる(同 すま)四冊よおよせぬいそのたゝせまひよかく書あ  
 つめ給へり(狭)三上ノ月もおそく出て空もかきわたりたれば雲のたゝせまひたよ  
 むらトトトトも見えせ(同)一下ノ夕ぐせのそら霧をたりてありかさどめたる雲のた  
 させまひうら山うかがめやり給へり(同)一上ノさるのけふりのたゝせまひ志  
 らせ奉らんことも(和泉續)くれつかた霧のたゝせまひそらのけさきあせあれ志  
 せらんとて(狭)四上ノおそトき岩のたゝせまひも心あるれささく(同)木草のた

させまひまでもかへてからせ(瀧松)一上ノいそのさゝせまひよのつねからせ

**たれ** 誰 (伊勢物)九十云々 後たれと知りよとり(万)十五「かが月の志ぐせの雨

の山ぎりのいぶせき我むねををばやまむ(源 若紫)四十あく人むかへ給へりと

さく人いたまならん(同 東や)六とらへ給ひてさせ名のりこそかか(古)三戀

よみ人「思ふどちひとり」が戀かばさきよそへて藤衣きん(同 さかさ)五十

しらす「たさう紙の手からひをさしたる御木丁のもとと落たりぬ云々かれのさきがぞれ

しきことあるものゝさまかを(後拾)春下「山里にちりてぬべき花ゆゑたれと

いなくて人ぞまさるゝ(後撰)秋上よと「こんといひ一程や過ぬる秋の野たれま

つ虫ぞ聲のかさき(新後)春上「鶯のさかさざりせば山里たれとか春の日をく

らさま(後撰)秋上「秋の野あきやさる人もおもえせたれをまつむしこゝらかく

らん(補)万十「あし引の山よゆきん山人のこゝろもあらせ山人やたれ(後拾)

別道信「それが世もどが世もいらぬよのかりよまつ布さいかあらんとすらん(古)

戀四河原「とちのくれ志のおもちせりされぬよとたれんとおもふこれからかく

ま(續拾)戀一「あぢきかくつゝともてとされぬと色よの出ぬ袖の泪を(同)九

條左大「今のさゝせまらやせまらとさ川たれぬるのふう死名からね(玉葉)



戀三よみ 「あへて世のあわれのあどりかけざらんされゆゑさゆるいのちなりとも人しらす

これさのり ラマレグ (源夕顔) 七 手さぐりにもあるさわざかれ誰さかりよかあら

ん (同 玉葛) 二 たれさかりとか覺ゆ此君との給へばいかでかさまでいと聞ゆまば

補 されかれ (うつろ 藏開) 上ノ一 されかき見給ひていとどうわらひ給ふ

これといふ人 (狹) 一ノ上 誰といふ人さるべきを給ひつらん

附たれてふ物ぐるひ (枕) 十四 世の中は猶いと心うき物の人よにくまれん事を有

べけき誰てふものぐるひかわき人よさ思ひまんとし思ひん

これとなく 誰ト定メタル されといふ たれともなく (後拾) 春下源 「山里にちり

さてぬべき花故よたれといふて人ぞまざる (同) 春上後冷 「つとよくる人のこ

れともかりけむわが若め野のわかかなれども 泉院内侍

補 たれからなくよ タレユエナ (源わかあ) 下ノ九 「あまの世をよそよきりめやまの

うらよもいそされしもたれからなくよ

たれのひとか (榮みはてぬ夢) 五 かひありていとどう時めき給ふされば大將殿さぐ

君をば誰の人らおろかよ思ひ聞ゆる事あらんかぞとおぞの給ひける (夫) 和泉式部

「庭のまも見えむちりしく木の葉くづいりでもこれの人かきて見む

これといふ たれてふ されの 皆イカナルドノヨナト

これもく (源 若紫) 七 ゆゝうかん誰もくおぞしなる (同) 八 あやう思ひの外

よもとあきれてたれもくゝるたり (うつほ 國讓) 中ノ七 さらばともりくもをか

らひよあるべき事なるをまづと思ひまんとされもくゝと仰らるれば源宰相をか

給ふ 是ハヒトリノ如クドナラ

補 たれもま (新後拾) 戀五 「たれもまをばいとふことさりをしらばこそ

の人もうらまめ

補 されぬの (宇治拾) 三ノ九 湯殿のたれぬのをとれおろして云々されぬのにつゝみた

るわらをば

たれこめて 契云詞書のおろこめてあり半部か也 (古) 春下藤原よ心ちそこを

ひて云々 風よあさらととておろこめてのみ侍りける間に云々 (六帖) 六ノ下 「たれ

こめて春の行へもあらぬまにまら櫻もうつろひよけり (榮花山) 三ノ内 よもたれあ

めておそしめて御聲もよませ給ひていとさまあきままであかせ給ふ

たそ 誰ぞノ (源花の宴) 五 あなむくつけきあはそとの給へば (後拾) 雜二 人の局

をしのびてさゝさるるよたそととひ侍りければ (宇治拾) 二ノ廿五 あゝに人の音ける



いたそと志のびやかまいふけそひ(同)あふゝる男もおそろきてそそくそふ聲をきゝて(同)あれいそをぬを人うかとれゝる(著聞)十六をなひちあてたそとへそ

たそかれ(白文)十三 語別至昏黒(源夕顔)七「よりてあそそれかとも見めそがれ

まののト見ゆる花の夕顔(同)廿二そがれ時のそらめかりけり(同松風)三たそが

れ時おそゝつきさり(同常夏)五そがれのおぞくゝきよ(同藤の裏葉)五そが

れ過て(拾)雑春「あゝ引の山そとぎに里かれてそがれときよかのりそら

も(うつろ)菊の宴(四十)「夕暮のたそがれ時のかかりをそくそちよれどとふ人も

かゝ(万代)夏小「夕月夜とそがれ時の郭公名のりがはるる聲を聞ゆる(躬恒)「五

月雨のそがれ時の月おけのおぞろそよわわが人とまつ

とつ(夫)七更衣よみ「夏衣たちさるものを相阪のせきの清水のさむくも有りか

(同)七「子どもかくこぞの月りゆめぐりあひて又そちきさるゑらがさね哉(古)

秋下「神おひのみむろの山を秋行にいきそちさるこゝちこそそれ(源常木)廿その

なむこのさちぬふ方とのそめてあがき契よぞあへまゝ(同手習)六十そちぬひかど

そるを

たつ(建)家堂ナド(源さかき)四十ことよたてられたる御堂の云々(夫)十九「堂た

て一岸のかひある藤浪のそびれてとも思ひやるかを(同)卅(新六)信「おのづか

らくちのこりさる門をらわがいへいかでそてあそさま

とつ(障子)障子木丁(源常木)卅木丁と障子口よ立て(同空蟬)三此きひよたてさる屏

風さも(同少女)卅八屏風をどたて(同花の宴)五やせらいたはれおろして戸のおそ

てつ(同紅葉賀)廿七引たて給へる屏風のもとよよりて(補)万代(雑三大)「あけてくる

人たよもかゝ柴の戸を峯のあらゝの吹たてゝより

とつ(車馬)源蜻蛉(四十)御馬をがらたせ給ひつゝそのへらせ給ひける(同空蟬)

三ひぐりのつまとよたて奉りて(同葵)六ひまもかくそちわさりさるよよそそく

ひきつゞきてそちとづらふ

たち(常)云居た(万)十六「秋され雁とびこめる立田山とちてもゐても君を

ぞ思ふ(伊勢物)段たちて見めて見まど(源空蟬)十ことこの戸口よかいをひてか

くきたち給へま(同夕顔)卅五たちあがらこかたよ入り給へとの給ひて(同)卅参る

人々もそかたちながらまかづれば(古)は「おひさかたもかたあそありと



けたてれをれどもかきこゝちぞる

〔つ〕 其坐ヲ退（源 若紫）廿とちたち給ひぬ（同）四十惟光承りてとちぬ（同 少女）九座

をひきてとちたうびなん（後拾）春「花の蔭さ、まくをいきこよひりな錦をさらけ

庭と見えつゝ（壬二）中「小山田よちりく花のから錦さ、まくをいみかへるかり

金（山家）下「ちりちりしそかの匂ひのおでりおそみた、まうかぞし法の庭りを補

（古）雑上よみ「おもふどちまとるゆる夜いからよきた、まくせしき物よぞあり

ける（万代）春下「けふくれてあはたとたにかき春あればた、まくをいけ花の陰のな

〔たつ〕 立。名ノタ（後）戀三紀「津の國の名よいた、まくをいみこそをくもたく火の

下よこがるれ（万）四、五「吾名のもちかのいそよとちぬとも君が名た、バをい

こそかけ（新拾）戀二少「あはさる、身とバおもせせこどうらに立名くるしき夕烟

かを補〔月詣〕七重房「さやけさをかがむる空の夏のよも名よとつ秋の月よかそらせ

（續千）戀一「人めをも今のつゝまど春霞野よも山よも名いよゝゝバとて

〔たつ〕 （千載）戀四「戀ぞのこゝかまの市よたつ民もたえぬおもひよ身をやかへてん

（古）雑上鶴洲にたてりと「あゝたづのたてる川邊をふく風よよせてりへらぬかこ

かとぞとる（夫）七（和泉式部集）水のをとりに千鳥のたゝ「友となく川瀬よのこぞ

立るけるも、千鳥といわれかいひけん（好忠）五月「驚とてる五月の澤のあやめ草

よそめい人のひくかとぞとる（新勅）賀八月野山よ鹿たてる所前關〔千載〕夏顯綱「五

月やとちけきと山よとつ鹿いとよのこぞ人よとらるゝ（夫）十二惠慶「とと山の尾

よとつ鹿の聲さゝてもてをかれてもぬる、袖かを（同）十二判者俊 成朝覺法師「あらち男のい

るさの山よとつ鹿の忍び聲よつまをふらん（同）清輔「あはくれよきりふの岡よ

たつ鹿のつまのゆくへも見えせとやかく（同）卅六忠房「夏かりのせこがいるのよとつ

鹿の秋よりささよねをや鳴らん（同）隆季「あら菅やまの、かやそらいちとるくあ

きたつ鹿のふとならはらん（後）秋上菟盛待鹿と「のひもかきこゝちこそをれさを

いかのそつ聲もせぬ萩のよきき

〔とつ〕 （古）序上よたゝんことゝたたく

〔とつ〕 願立願（風雅）神祇後西「うでにをかき國つ守りの宮さしらたてしちりひの君が

爲りも（源 薄雲）廿「いかめしけ御願をもおそくたてゝ

〔たつ〕 位コツナ也（榮 さま）く「かくてとかど 一條 東宮三條 たゝせ給ひぬきバ云々梅

壺の女御后よたゝせ給ふ（同 花山）七 三月十一日中宮たち給はんとておそきおとゞ

いそぎさこに給ふ



たつ 草木ニ(神代紀)下ノ天稚彦門前所植湯津杜木之抄(古)上「そまよたてりける

梅の花ををりてよめる(古)はいか「秋の野よかまめきとてるををかへーあかか

かまー花も一時(頼政)上卅「千歳までわきとみよとや君が代のひさーちかく松

たてるらん(新古)秋上「さびーさのそのいろとーもかへりけを楨たつ山の秋の夕

暮(後)春下「とりつればさぶさよれがるさてかぐらよの佛は花奉る(方)廿二

まささつあら山とちを(同)六ノまささつ山十一「さびといふ詞あり(後)秋中よと「を

とかへー草むらごとよむれたつたれまつむーの聲にまよふそ

たつ 毛ニ(文粹)廿八返隨身表身毛皆豎(堀後)俊「ことのねの琴柱よむせぶ夕ぐれ

の毛もいよたちぬをむろさむさに

たつ 旅ニ(源わかし)四さち給ふ曉の夜ふかう出給ひて云々「打せて、さつもか

かき浦波のをでりいゝよと思ひやる哉(古)大哥「あふみより朝たちくればうね

の野よさづぞかくかるあはぬこのよ(同)離別「をーむら戀しき物をーら雲の

さちかん後の何あ、ちせん(伊勢物)六十あけは尾張國へさちかんとそれば

たつ 烟霧雲(新勅)秋上「天河星合のそらも見ゆさかりさちかへたてそよその秋

霧(伊勢物)八あさまの嶽は烟のさつをきて(後)羈(風体)能「都をば霞と、もよ

ちーりど秋風ぞふく白川の關(後)秋中「秋風よいとふふゆく月影をさちかかく

ーそあまの川霧(方)三十九「あまか川かのよどさらせさつ霧の思ひすぐべき戀まあ

らかくよ(古)秋上よみ「山櫻わが見よくきば春がそと嶺よもをよもさちかくーつ

、(同)秋大和國よ云々霧のさてりけるを見てよめる(新古)秋「むら雨の露もまた

ひぬ楨の葉にきり立のぞる秋の夕暮

たつ 上ニ(源常夏)廿此りさくのをけかうもてかー給はんに殿の

うちよのさてりかんや

たつ 波風ニ(万)四ノ「とされこのあら磯よよるいそへかみさちてもあても我も

へる君(伊勢物)七波のいと白くさつをきて(千載)戀二「いそがくれかきはやきと

も、ーは草たちくる波よあらひきやせん(新古)雜下式子「くる、まもまつべき

世か、あたー野の末葉の露よあらーさつ也(和泉物)つこもりかさよ風いたう吹

て野分たちて雨をどふるよ

たつ 月日の(来月)「さちぬる月去月(後拾)雜一「あき人のおとづきも

せでことのを、さちー月日ぞかへり來よける(拾)戀一(兼盛)廿「あふおとのかた

いざりるるとどり子のさ、ん月よあはトとやる(後)戀三遠き所よまかりてた、



ん月をありまかんまりりへるべきといひて云々(堀後) 經月戀 顯仲 「あそぬよの敷や  
いつもるいりあまばたちぬる月といふにくるべき(源) もみちの賀 十此月のさりと  
もと宮人もまち聞え内にもさる御心まうれどもあるにつれなくてさちぬ

**補** たつ 絶 (後拾) 冬和泉 式部 「さびーさに煙をたよたトとや柴をりくぶる冬の山里

とつ 春秋の來 春にいふ (古) 上 春さちける日よめる(同) 上 秋立日よめる

たづ 鶴 (万) 六ノ十二 「わかぬ浦に汐をちくれればかたをかまあべをさしてさづあきと  
さる(後) 戀三 右大臣 「あーさづの澤べにとーへぬれども心の雲の上のみよをかへ

女四の 「あーさづの雲井まかゝる心あらばよをへて澤ま住ぞあらま(兼盛)  
みこ

廿一澤水ま老ぬるかたをさるさづのなくね雲に聞ゆるんやぞ(順) 廿一「天つかせ  
そらま吹あぐる雲もあらば澤にぞさづのなくとつけかん **補** さづむら(万) あめのた

づむら。さづのむら鳥(貫之集)むらさづ(惠慶集)(万) 廿一「いへおもふといせぬぞ  
それば多頭我奈久あーべもみえむ春のりそとに

とつ 龍 (散木) 戀の心を 「くちとーや雲るぐくれまむたづも思ふ人まひみえける物を

とつ 奉るの (千五百番哥合) 野宮左大臣 「九重まふふとてそむる氷こそ風まもとぬと  
めーかりまき(六百番哥合) 元日宴 經家卿 「松が崎さえぬひむろまへらきのちよれとめ

いとけふぞとてつる。明阿云奉るを畧てたつるといふ此詞日本紀の訓集またハ物  
語まも見えさりとつるまつきといへるハ奉貢也

○ とつ ちり (万代) 賀花園左大臣 賀家小大進 「君がよハ光つきせぬ日の本ま朝とつちりのまむも  
いられむ

○ とつ 万 (万) 十三 廿二 こもりくのもつせの川此をちかたま妹らいたハこのりたに  
これハさちて

たつ (源) 帝木 廿 二 のまたつ物(同) 空蟬 ふさあるの小うちぎたつ物(同) あけまき 五十  
京まさるべき所々ま行ちりたる娘どもめひだつ人二三人尋よせて参らせさり (同  
よもまふ) 十侍従もかの大貳のおひたつ人かさらひつきて(同) 帝木 四もとめつる中  
將さづ人まあひさるに(同) 末つむ 六めのとたつ老人あどハ(同) 夕きり 五上薦たつ  
人々御せうそこ聞え給ふ(同) 帝木 廿 五 むあ家まつ柴垣して(同) 藤はかま 三十北おも  
てたつかたにめーいきて(同) よもまふ 廿 三 ささるべきわさとのさづやもかく(同) 権  
か本) 廿姫君さちの御うしろみたつ人まな給へるかりけそ(同) はたる 八よべい  
とめおやさちてつくろひ給ひ御まそひを(重之) 一道風翁たちてハいとまかこ  
犯手かきかりとて云々、重之のこと(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ

をいふ所に(同) わかま 九 上 ひとりさち此世をかれ顔まもあ



らぬ物から(同 竹川)廿八とゞ人たちて心やそくもてあし給へるさましもぞけしあ  
まろしうめでたありける(同 権か本)廿九何かたゞかゝる山ぶしどちてそてしてんと  
おほは(枕)廿六ノ 修行者どちたる法師のよむかめりとふと驚かきて(同 浮舟)七十物  
のけどちてあやと侍れば(枕)十九おとあざちる人のいやしからぞ忍びやかかる  
御けそひよて(同 手ならひ)廿六観音の御あるしうれしとおとなざちりへり申たち  
てまうで給ふかりけそ(枕)廿三をのこゞの十をりあるがあやしき弓をもちどち  
たる物あどさゝひさるいとつくり(同)十九るあざち事そ死て(同)十二あん殿  
をさて、東のたいどちさるやをつくるとて(同 御法)十七風のこきどちてふく夕暮し  
(同 夕顔)十九えんごちけしきままん人の(同 さかき)廿そらあざちていとをかい(同  
句宮)十七右のそけ(カナル)も聲加へ給へやいとまらうどたゝしや(同 常夏)七お  
そきとどつそちよて(濱松)三きゝやかあるあん殿どつものこそきたのといよや(同  
胡蝶)三とづらゆひてもろこゝどゝせて

とづかのゆと(夫)廿二家集「わりれしとづりの弓の白鳥をきのかそめそりこひ  
ぬ日ぞあき(補)此故事の俊頼抄にある(万)十九「手束弓手にとりもちて朝かりし君  
のたちいぬさくらの野」廣足云手お握る故にいふ御とらしの梓弓といふに似たり  
五ノ十云々手つか杖こゝにたかねて云々

(壬二)上「ひきとめよきの關守がとづらのゆとをるのわかれもとちやかへると(散  
木)「引をかほとづかの弓は矢をそやみともねしまとのかりかえはかあ

たづりなき(續紀)十七宣命拙久多豆何奈伎 朕時顯自示給禮波(源す  
ま)四十一とづかあき雲井よひとりねをぞなくつをさからべし友をこひつ(補)万  
十五「多都我奈伎あしべをさしてとびわさるあかとづりひとりさぬれば

とづぬ(尋)宣長云スベテトアラフ事ヲ尋ヌルトハイハズ尋ヌトハタトヘハ先ダナテ  
ノコナドニイヘリ尋ノ字(新古)四「思ひ出てよあし月し尋ねばまてと契りし  
中やさえあん(此哥よての早く契り置し跡)源よもきふ(十世のう死時の見えぬ山ぢ  
をこそとづぬを)同夕かは(六)此扇のとづぬべき故ありて見ゆるを(万)廿五「わ  
さるひのかたよきやひてたづねてあきよ死その道又もあそんため(同 逢生)三末ッ

ふりそへてしもえたづね聞え給ひせ(同 夕かは)初とふらそんとして五條ある家とづ  
ねておそしり(同 帝本)廿七かのかぞしあのらうとく侍りしかばいかで尋ねんと思  
ひ給うるを(同 かけるふ)九十四京よかんあやしき所し此頃きてるたりける尋出給ひ

て(同 帝本)十絶ぬそくせあさからで尼よもあさで尋ねとりさらんも(同 わかき)上  
四りの紫のゆかりたづねとり給へりし折おせし出るよ(同 うきふね)十六いがてこゝ



からで又いさづねあふべき(同 帝木)四十 おんせうをおあれと小君えたづねあをせ  
(同 帝木)十 御ありさまとづねとひ給ふ(同)六十 おりさちてたづねありかん  
もかたくかゝるとや人のいひあさん(同 蓬生)四 御調度をも、云々わざと其人あ  
人よせさせ給へるも尋聞て(同 かりつは)廿 おもはらん所よどあたづねゆかんとね  
がひ給ひしるゝとやつひようせ給ひぬま(同 手あらひ)四十 さまさかよとづね  
よりて(同 夕か)九 猶いひよれたづねあらでいさうとゝかりかん(同 帝木)廿 尋  
ねまよもさんともくれ忍びせ 千載戀三、尋ね失ふ戀と「かちざりに三輪の杉と  
いへる心を時昌」  
いをへ置てたづねる時いあそぬ君哉(新古)旅ひとり具たりける同行とたづね  
失ひてもどのいもやの方へりへるとて(夫)廿二 家「わけもせせとづねもいらとこ  
集定家  
よひあぞいくさ小野の木がらゝのこゑ(後)戀二 兼晚王「あゝ引の山下をけくもふ葛  
の尋ねてこふる我とあらせや(万)九 長まさきづらとづねゆぬま(古)戀五 伊勢「三輪  
のやまいかよまちとんとふともとづねる人もあらとと思へ(同)雜上 忠房「君を思  
ひおきつの濱よかくとづのたづねくまをどありとさまさき(新葉)春上 祥子「名よ  
内親王  
いおふ花のたよりにことよせてたづねやせまゝみよゝの、山(拾)秋 爲頼「おぞつか  
あいづこなるらん虫のねをたづねば草の露やまたきん(山家)「そとゝぎは聲はさ

りりよありにけりたづねぬ人よ五月つぐら(金葉)夏元「そとゝぎは音羽の山の  
ふもとまでとづねしこゑとこよひきく哉(補)万十九、二十「とゝのそにあゆしとゝらば  
さきと川うやつあつけて河瀬たづねん(同)九ノ二十「とつまゝそこよありせばあら  
せともたつかの濱のとづね來をま(續後撰)冬 俊成女「ふとわけてさられたづねる  
人もあゝ霜よくちぬる庭のもち葉(夫)月 定家「あらゝふく月のあるとゝ我ひとり  
花こそやどゝ人もたづぬれ

たつがみ(頼政)下ノ九「おちかゝる涙やあぢき戀路ゆく駒のとつがと露ふしよたり  
(金槐集)上ノ卅一 黒馬をとびけるをまこの日とけるよたつがと紙をむをびけると見  
れバ

とつがと立田(古)秋下 深養父「神をひの山をすぎ行秋なればたつた川よぞぬさい  
むくる(重之)九 山崎川をたつた川といふをつくへゆくとして「あら波のとつたの  
川ぞ出より後くやゝき舟ちかりけぞ。宣長が説よこのたつと川の津の國島上  
郡よて山崎のあさり也神奈ひ山の山城國乙訓郡よて是も山崎のあさりかぞ大和の  
たつと川とい別也

とづく(金槐集)上「夕やみれたづくゝゝきよ時鳥こゑうらかかゝ道やまどへ



る(万)<sup>四ノ</sup>「くさかへの人江よあさるあーとづのあかたづくくともかーにして

(同)<sup>四ノ</sup>「夕闇の路多豆多頭四月まちて

たつゞみ<sup>手鼓カ(うつろ 藤原の君)廿九</sup>たつゞみともうちて草かり笛ふく<sup>補(榮 御裳</sup>

着)このとつゞみといふ物まいよも似ぬおちてこほくいとぞからしくくめる

とづら<sup>田面(伊勢物)五十一</sup>「打わびておちぢひろふときよませバわれも田づらにゆ

かまー物を(夫)<sup>十四千五百西園 寺入道太政大臣</sup>「たづらをるわらやの軒のこもをざれこれやあが

たのゑるーをるらむ

とつとひこ<sup>風ヲ司(万)九ノ</sup>「我行<sup>ユキ</sup>の七日の過一立田彦めめ此花をりせよちらをを

(神名帳)大和國平群郡龍田比古龍田比女神社二社(祝詞式)<sup>九ノ</sup>龍田風神ノ祭アリ

とつたびめ<sup>たつたひこと同じ姫神也うつり(古)下</sup>「立田姫たむくる神のあればこ

そ秋の木の葉れぬさとちるらめ(貫之)<sup>上ノ</sup>「もそちをのぬさとちるるか秋まつる

たつたびめこそかへるべらかれ(夫)<sup>四ノ</sup>「立田姫花のちらぬふとりをてけふや

とむろよかさまつりをる○此哥判者清輔朝臣云春の色をそむる神をばさは姫とい

ひ秋をそむる神をばとつと姫といふ<sup>云々</sup>春のたつと姫いとめづらく<sup>云々</sup>哥

合かどよかやうの異事によむまどき事とこそ聞置て侍れと<sup>云々</sup>

とづのむらどり(うつろ 田つのむら鳥)六「かでおるは松の林におよひよりちよを

ばとせよとづのむらどり(同)同「松かけよかそあるとづのむら鳥もよをへされ

と思ふものそ(貫之)<sup>上ノ</sup>「かのとゆるたづのむら鳥君よこそおのがよそひをま

かへべらかれ

たつのうま<sup>龍馬(夫)廿七</sup>「山高と石ふむ道のをるはさまとつの馬をも今えて

ーがを

とつのこま<sup>龍駒(夫)廿七</sup>「たつのおまも今もえてーり青よよーからの都よゆきてと

んさめ

とつのき<sup>田豆(堀次)廿七</sup>「田豆の木よそひおるされる薦よしも時をりがにゆと

ちよけり

とつのとろほ(長秋詠藻)<sup>下廿七</sup>そとめて君がとよよこそ雲のりけそふみかよひ

とつのとろほにちのづきて

たつのとろひめ<sup>龍ノ(夫)廿七</sup>「契りあれば鶉の羽ふきける濱屋よもたつのみや

ひめかよひー物を

とつくり(夫)<sup>廿三素</sup>「楨のーまさらーのなとる手作りよ見えまがふまでさぎぞむ

覺法師



きるる

たつま(大鏡)五ノ御せゝのいと興ありしかりちひさけ柑子を大方の玉よつらぬかせ給ひだつまよの大柑子をしる御せゝいとあかく

たづさふ

携。又タツチャハル(万)九ノ心ナルアリ(万)十八ノたづさひり二人入るて(同)五ノ一人もかき國もあらぬかわぎもよと携ゆきてたぐ

ひてをらん(夫)卅二土御門内大臣「男山鳩の杖よゝづさひぬから坂のぼるゑるしあらせ

よ(万)卅九ゝづさへてが二人見し(同)卅二袖ゝづさひり(六帖)五「あめふりて

道もあしき鳩鳥のゝづさひくるのめぐりやのあらぬ(人丸)五下ノ(万)十(赤人)

(拾)一人でとの夏野の草と(万)のちやくともいもと我とゝづさむりかね(散)十五

糸と竹とのよゑさえ云々此事よゝづさむる人をバ其むしるよめしめてもてせや

させ給ひ(宇治拾)十二弓矢よゝづさむらん物何かバわがを思はん事の候とんと

申けれバ(和泉式部)上「おにはがとぎその蘆よたづさむる舟といかゝしある我

身か(補)万)十七ノゆふされバ手たつさむりて(同)十二「あぢさむ目よあけ

ともゝづさむりおとゝもなくもくるしかりけ(同)十八ゝづさむりうあかけりる

て(拾員)上「あまどおねやゝたづさむる蘆のよ心もとまるれさの雪か

ゝづさ

仙覺抄コハタツキ

んゝづさむらむ(大鏡)八世の案内もあらむゝづさむかりし(古)八春上よみ

(猿丸)十一「遠近のたづさむらぬ山中はおぞつかかくも呼子鳥か(源)はしひめ

五いとゝづさむらぬこゝちしつるよろれし御けむひよ(万)四「むかひ

ゐて見まどもあゑぬとぎも子よたちわかむかんゝづさむらむ(源)夕かほ)四十

此人のたづさむしと思ひるをもてあしたをけつゝさふらむ(同)むひ)卅見し

世のあでりかく人々さへりれあバたづさなまさりぬべくかん(万)八

六ノ十「あふといふのえもあづけりいふをべのたづさむあきあがとをりむ

(源)東や)六十かゝこよもゑるべかくてたづさむ所をとせめてのさま(夫)五

「たづさむきこのゝを山によぶあ鳥まつひひとつのめぐとをりけり(源)帯木)六世

よふるたづさむかく時世うつりて(万)卅二「あかと泥のかゝれ時よ鳥か泥を

あぎよし舟のゝづさむらむ(補)万)十二梓弓末乃多頭吉波らねども心君よ

りにし物を(源)行幸)十内侍のかみ宮つかへる人無て云々女官あまおほやれこ

とをつらうまつるよたづさむかくこととだるゝやうにかんありける(同)橋姫)五

とかくとぐるしゝづさむきみやのうちも



たつき立木(新古)雜中「ふるさたのそべのたつきにゐる鳩の友よぶ聲のそそき夕ぐせ(増抄)立木也西行」拾玉六「あそをかのいづがさつ木に志すゝるて谷よりつふ鶯のおる(續後拾)雜下「くちねさうき身あがらのもい柱世せわさるべきさつ死たまか」

とつき斧ノ(著聞)十二男のかたぬぎてたつきふりかゝて大木をきりさるあり事也

(夫)廿一家「柚くたけいふ死がおくの川上にたつきうつらうけさかよる(同)同後「とへたるひさらの柚のさびしきまさつきの音のそりあるかあ(夫)六十三京極

(新六)四「あそぎあるとつきの斧のえをよわみおもひさられぬ世こそつらけき為家

(拾玉)五「からえたせさればそもゆる岑の松さつきの音またえまあらはを(和名)

十五鑞廣双斧也和名多都岐(方代)雜三「まりきれるひたのたくとがたつ死おとあか十

りーがまゝかそやよの中

たつと(源東や)六夜行うちてやかのたつみのそみのくづれいとあやふい

たつと脱履(御代始抄)脱履といくつせぬぐといふ意也昔虞舜といふ聖人の天位と

むさがる心のまゝまさるよよりて位とさることをバ敵れたる履をぬぐぐとく思ひ給へりやぶれたるくつせぬぎをつること露さかりをいさ心をきよたどふる也

これハ舊主につきたる詞也

たね種(万)十四「りまつけのいのちのぬまようそをかぎかくこひんとやさねもとめねん(うつは藤原の君)七むらへまともうちまきよねいるべし綴にてたねをさ

バおほくあるべし(夫)五久安「賤のをが小田の苗代をめそへつむろのそやわせ種

かいつらん(同)俊頼「秋かりむろのをいねと思ひ出て春ぞたを井にさねをのり

ける(後拾)賀家集。少將敦敏子うませて侍「姫小松大原山のたねかれバ千年のま

こよまかせてをみん大原山の春日大明神を勸請の山あり(神代紀)上三以樹種而下(夫)五堀川院御

「賤の男が苗代りきをあせ置て今ぞたかるにたねおろしける時國信卿

たね胤(源常夏)廿あなめでたのわが御おやゝかゝるけるたねをがらあやしき小家

におひ出けること

たね種。上ノ種ト(源東や)卅かきからぬ身よもの思ひのたねをやいとゞまかせて

見もべらん(古)序やまと哥のひとの心をたねとして万のここの葉とぞかれりなる

(夫)廿ノ。僧正遍昭のも「とをへていたくかめでそ花の山ぞさいのさねとからぬものゆゑ(源手習)三むつせの観音の給へる人かりとの給をそれバ何のそれ縁よ

あさひてこそとちびさ給らめたねなき事いいかでか



とねかす カタチヲヒヤ (夫) 五親隆 「賤の男が小田のかさしるをめそへつむろのそやわ  
せさねのーつらん(同) 同俊頼 「秋刈むろのをーねを思ひ出て春ぞさ井よさねを  
かへける

とねん 他念(宇治拾) 三 念佛のたねんかく申て死ぬまば  
たか 店(崔豹古今注)店肆也所以置貨鬻物也(土佐日記)やまさきのたかなる 此たな  
たがひ(うつは 藤原の君) 卅 これもて、たかよ女とりつ、物うる(同) 同たかよそ  
有べし 商人の家とさしてたかと。土佐日記のうつしあ。藤原の君なる繪の所といへ  
てうる いへる事古書に例なし。やまれるるべし。るい後入のかきいれしあれ  
たいふに

とさ 棚(枕) 五ノ 宜陽殿の一のさか(源す、むし) 七 あかのさかなどをてそのかさよ  
あかさせ給へる御をつらひなどいとをまめきとり

附たかづー(源 東や) 卅 あかさのなきたるのたよなしてさかきたかづー一よろ  
ひさかりさて

とささー 棚橋(万) 十一 「天あるひとつとさささーいかでゆくらん若草のつまかりと  
いひてあゆひよそをふ(古) 八 戀四よみ 「まてといもねてもゆかかんちひてゆく駒  
のあーをさまへのとささー(夫) 卅 六旅 「とささーよかつと駒をうかがうてうひ  
信實

うひーくもいづる旅かな(同) 廿一 知家 「いたづらよ月日ぞわたる足引の山はたかさー  
かけて戀つ、〇契云板よて棚のやうよ柱たて、渡したるといふべー 補(新續古) 中

後押小路 前内大臣 「山里のまへのたかさー苔むして往來まれなるをどぞーらる、  
たなど (伊勢集) 十 かりをる人をかかの家のたかとちうくまへあるよよりきたり

とさ 手繩(夫) 八 よみ人えらす 「久方の月しかつらのうりひ舟川風そやーたかそ  
みざるを(同) 八 忠基 「うのひおねちかふたかさをさばくとてともいぞかぬるよその  
りりり火(同) 同顯輔卿家 「あまことるよ川のたかそきれよなりとぞれがちあるわ  
が心りを(新六) 三 知家 「岸たりみつりのとさそのうちをへてあがき日あがはくる、  
空かを 補(新千) 雜上 俊頼 「鶉舟さば夜河のたかそ打そへて一そぢから物ぞかかーき  
たかそた 機織女あり機のかまへい棚ある(古語拾遺) 三 今天棚機姫神織神衣(古事  
記) 上四 阿米那流夜於登多那波多能宇那賀世流多麻能美須麻流 云々 おとい末子

たかそた 七月七日に祭れ(万) 八 二 ひこぞーのささをさつめと天地のわかれー時  
ゆいをかむーる川よむきさち 云々 万葉にみえたるの七夕の星の名にて上にあげさる  
たなばたとよむいかいど聞ゆれど月清集に一二三を 「七夕の秋の七日よあられよき  
句の上あするて秋の哥よみけると有て第七首目に

たのびりぬべきそらのけーき とありまかれが早くより七夕(夫) 十 安藝 「とーをへ  
をたなばとよみしことあり



てまれあふよの明行びみる人くるしとあさとの糸(同) 同後久我 一あひとてもな 太政大臣

不ゆくそゑの契をや結びかさぬるさかばの糸(和名) 一、織女兼名苑注云、織女和名

太奈八牽牛爾雅注云牽牛一名河鼓 和名比古保之又。たかたつめのつ文字ハ助語也。(東三條院を

木豆女 太奈八牽牛爾雅注云牽牛一名河鼓以奴加比保之。つ文字ハ助語也。(東三條院を

てしこ合)とあさたひこぞし雲のうへにあり 云々(後撰)秋上よみ「たぐひあき物

とい我ぞかりぬべきたあさたつめの人めやのもる(詞花) 秋元任「萩の葉よながく糸

をもさへがよいたなをたよとやれさひひくらん(古) 秋上よみ「あまの川もみぢを

そしは渡せをやたあさたつめの秋をいもまつ(有心無心哥合) 「思ひやる心の空よ

あらるまばたあさたつめのころれかあしき 「あふことをまつとあききし時よりも

たあさたつめの今やわぶらん 補(北邊隨筆)云七夕亡父成章云たあさをさの星の名あ

り七夕のあぬかのゆふべかりとあさをさ七夕とあくべからば万葉集よもあぬかの

よひとよめり俗よ七夕とあさをさことよむ事そのいそれとらせとぞ

とあか 田中(堀次)稻妻「そかあしや田中のさといあつまのそとあさかひをこの

めてぞふる めてぞふる

たかた 棚田

とあき 手馴。手ナレ手ナレ通(好忠集)の歌(夫木)にてあきり とあ(好忠)二月(夫)三「冬

がひのたあきの駒もそなちてん岡部のをさへもへぬとからば(源紅葉賀) 廿「君一

こばとあれの駒よかりかそんさかり過る下葉かりとも(詞花) 雜上俊雅母「夕ざりに

さの、船橋音をかりとあれの駒のかへりくるかも(夫) 卅三、六「むかしきく君がと

あきの琴からば夢にいられてねをもとてま(同) 十八權僧「とやかへるとあれの

鷹を手よそえてきべはかくなるり野へぞゆく(後撰) 戀二小町姉「わがやその一むら

そ、さかりかそん君が手あれの駒もあぬかな

たあそあ(神代紀) 下廿掌

たなつた 棚田(夫)十二「たかつ田のゆきあひのわさ田鴈鳴ておのがそつさまあ

りぬべきかあ

とあつもの(竟宴)「うはもちの神のちうらいつくさのとなつものをぞとよりか

しとる(夫) 卅一、正安大「いつくさのあひとされとるたかつもの池田のさとよ雲を

かいつ、(神代紀) 上ノ水田種子(夫)卅(堀太)百首「たかつ物みそのよまきついで

子ともそとの小田よくわるひろそん

とあしとふね(万) 一ノ「いづこよか船をてそらんあれのさきあぎたよゆきし棚

無小舟(万) 三ノ(古)大所「あそつやま打出えくれわかさぬひの島あぎかくるたあ



かゝ小舟(伊勢物) 九十三段 「あゝべまぐたかゝゝ小舟いくそたびゆきかへるらんゑる

人もかゝ(古) 戀四よみ人しらす 「堀江こぐさかゝゝ小舟あぎかへりおかト人にやこひとさ

るらむ(源 総角) 廿二 かへんこぎめぐらんいと人こらへあるさかゝゝ小舟めきた

るべゝかど(散木) 中四戀十三 「あゝまゆく棚かゝゝ小舟人忘れどこがるとそれどさそり

がちある(夫) 十八兵衛内侍 「あぎりへる棚かゝゝ小舟道もかゝ難波のあゝの雲れをたをれ

○契沖云ちひさき舟よふかゝなのおき也ふを棚といせかいとて舟の左右のそを

縁のやうよ板をうち付たる也 補(月詣)九幸平 「難波がさゝちも見えぬ夕霧に棚かゝ

小舟こぎもやられせ(万代) 雜三重道 「ゆふゝちたかゝゝをぶねあぎいでゝまのあ

ま人おきよつりせり(新後) 秋上土御門院 「かさゆちのゝまたちあくる朝ぎりよいやと

やざゐるたかゝゝ小舟(伊勢) 「たかゝゝのあまのせぶねのあらし磯にあかたゝ

となせひとりあぐ

たなうら (うつろ忠こそ) 「母君のいたゞきの上を蓬萊の山よかさんとたかうらの

内よあぐねの大殿をつくらんといふともたゞあそのいそんおといたがへトと養ひ

給ふぞに(神代紀) 上ノ右掌 給ふぞに(神代紀) 上ノ右掌

たなる(堀川百首) 俊頼歌顯 給ふぞに(神代紀) 上ノ右掌

也其種ヲツケテオクヲ種カストイフ也又種こそトモイフ也○貞徳説たなるトハ田

ノ中ノ井ノ中略ノ詞也(拾遺) 戀一實方 「わがさめいたかるの清水ぬるゆきと猶かきや

らんさていそむやと(堀太)(夫) 五俊頼 「秋かりゝむろのをいねを思ひ出て春ぞたか

るよさねぞかゝける(同) 同(堀太)國信 「賤の男が苗代か死をあせ置いていまぞたか

るに種おろゝつる(夫) 廿六返事せぬ人に長雅卿 「袖ぬらいたかるの清水いりかれぱり死やる

かたもあぐれざるらん(續古) 戀五弁内侍 「こすれぬの猶かきやらんあかざりゝさかる

の清水そでぬるとも 廣足按顯昭説によら 種井の意をるべし

たかてひ(雅亮裝束抄) 別 遠き國よまうりたる人よさか

てひのもこつかさねとて

補 たかゝる(万) 九ノ十八 「金門よゝ人の來さて夜中にも身者田菜不知出ぞあひたる

(同) 十三十八 「あゝがきの末りさわわけて君あゆと人よあつたを事いたかゝれ(万) 二身

もたかゝらせ云々(同) 九ノ廿五 かにねとか身乎田名知而浪のどのさこぐさかとの

たかびく ウストラカニナビク也 (神代紀) 上ノ清陽者薄靡而爲天(万) 四ノ十九 「心かくおもゆる

かも春霞輕引ときよ事のかよへ(同) 二ノ廿五 北山よたかびく雲の(後撰) 春上 「春霞

たかびきよなり久方の月の桂の花やさくらん(新古) 秋上顯輔 「秋風よたかびく雲のよ



えまよりのきいづる月のかたのさやけさ(源 あらし)八冊塩やくけふりかまかまたを  
びきて(古)戀四よみ(いせ物)百十段「そまのあまれ塩やくけふり風をいたと思そぬ  
方またあびきにり(源 あかし)八空の雲あまきよたあびけり(拾遺)別よみひ「お  
くまゐてわが戀をきば白雲のさびく山をけふやこゆらん(散木)上ノ五一「そり  
のりけひのきりいたあびけどのとりは過る望月の駒(同)八十八(堀次)夫(夫)頼俊「あ  
と雪もまどふる年またあびけばころまどのせる霞とぞ見る(古)忠岑今の山一ち  
あはきば春のかまよまたあびりれ

【さらし】陀羅尼(翻譯名義集)五ノ大論秦言能持集種々善法能持令不散不失(源 若紫)  
十ぐうづきてさらしよとたり

【さらちを】(壬子)下「うき世よて身いそとありそてぬ我まよそはかのりのた  
らちを(補 貫之)「世中にされか名たのきたらちをと我とがあかをひといらあん  
(元輔)「たらちをのかへるほどをををらせいでいかでそて、かりかひあそ此  
北邊隨筆引たる「たらちをのおやの心とらねどもこの身よこそのおもひさび  
あ順集とせり「たらちををといふこといつの頃よりかゝるあやまりのい  
ぬき(北邊隨筆)四ノ墮胎たらちをといふこといつの頃よりかゝるあやまりのい  
できにけんかみつ世よたらちねまゝのさらちこれもたらちねのとのとみえと  
誤りといふ説あり

りこき母よのといふ詞也さらちの令足の義よて養育して成長せしむる恩をいふ  
かれ養育の思の父母にもにわさるべけれと乳をあたへいだきはぐ、たらちをたら  
ちめともよゆめ、よむまどき事也あの事先達もくそく弁おられたまどあは  
まの因よいふかり又兼澄集にめおやにおくれそべりてほとゝぎを聞侍りてそは  
ちかゞ家よて哥二首其第二の哥に「そでのやまこちるべくのさらちめのおやのさきに  
ぞこれのさゝま(輔親)「さらちめのおやよさ死たつあゝらあらばさとの名さへ  
いいませぞあらまゝかどみゆればその頃よりいひそとめさる事あるべし廣足接にはやく貫  
之の歌にあればやふふるくよ  
りあやまりこしことなるべし

【さらちね】(万)廿五ノ「多良知禰乃波々をわかれてまよとわれ旅のかりはよやそくね  
んかも(拾遺)戀四万(万)十二十六「たらちねの親のかふこのまゆでもりいぶせくもあるか  
いもよあそきて(古)別離「たらちねの親のまもりとあひをふる心をりりいせきかど  
どめそ(好忠)十一月終「炭がまの煙に身をやたぐへまゝわがたらちねもさてぞさえに

【夫】州家集山家苦法眼慶融「さらちねはあとゝて見れば小倉山昔の庵を苔よ残る(源道  
濟集)「かへりていまづさらちねを見しものせけふのされかあさんとをらん(同)

「世のおとよかりよれきどもたらちねのおかトさまよて夢よ見えつるたらちめた  
ちとといへ



る後世の **補**(續古) 雜下 基良 「たらちねの心此やみをする物の子をおもふ時のあまた  
うたきり **同** 隆祐 「このその身こそしらねたらちねのかたむさひりよとふ人

も哉**同** 光俊 「たらちねのあらましかばと思ふお身のためまでもねをかかれけ  
る(貫之) 「おお下色の松と竹どひたらちねのおや子久しきためり也けり(續古) 雜下

為 家 「たらちねの道のいるべの跡をくいかまよつ付けてり世よつかへま(新古) 雜下 俊成  
「むかしたまむかとおもひたらちねのおやこひしきぞをかかりける

**たらちめ**(千載) 哀顯昭母の身 まかりける時 「たらちめやとまりて我をせましかさるよかふ  
る命ありせば(拾玉) 六 「たらちねもまさらちめもうせせてたのむりけあさ

かゆきをぞもる **補**(仲文) 「たらちめのむりのおやのかすこればうみのことどもぞ  
おもひやらる、「たらちめれむかしの親のさもあらばあれさてやうまのりみ此

子のよき

**たらぬ** テアラヌ (源わか紫) 四十 それをば何ともおぼしたらぬぞあさましきや  
ノ約也 **同** 桐壺 八 何事かあらんともおもしたらぬ

**たらぬ** 足ヲ 共ニ 足ノ所ニ出ス

**たらう** 太郎 (いせ物) 六 太郎國つねの大納言(源 榊) 四十 中將の御子の 云々 四の君腹

の二郎かりけり(同 玉高) 十 此家の二郎をかたらひとりて(いせ物) 六十 三郎なりけ

る子かんよれ御男を出こんとあまた(源 まさ 柱) 廿 わらひある八郎君のむらひ腹よ  
て云々 大將殿の太郎君と立からびたるを

**たらひ** 盥 (忠見) 九 「ぬきよりもなくくわれやとぐまををうくるたらひ  
ありやと(源 蓬生) 初 まちうけ給ふ御袂のせさきよの大空の星の光りをたらひの水

ようつゝたる心ちして(枕) 六ノ十七 せんざふし手水をさ入てたらひの手もあきを  
とあり(散木) 十四 鞍馬に参りたりたる師の房よ足のきさきをさぐんとて

たらひをもて来りたるを云々 「たらひしてあしをいかにさぐへき(夫) 十  
屏風 七月七夕まつりたらひの水入て影見る哥 云々 (同) 十 「彦星のゆきあふかた

をうつゝたらひの水や天の川波(同) 十 右京 大夫 「聞さやを二の星の物がとりたら  
ひの水ようつらましかば(新六) あした 家良公 「老よけるやともそのな朝どのたらひ

の水ようかぶ面のた

**たらひ** 足を延へ 不足ナ (源 行幸) 十 いとちうとくよおもちあゆまひな大臣と  
たる也 クナリ 五

いそんよたらひ給へり(同 紅葉賀) 卅 何事もあらまよしくたらひてぞ物給ひける  
(同 句宮) 十 いとせぐきてをうけし心をへかごもたらひておひ出給ふを(同 榊) 十



九いかにかうもたらひ給ひけん(榮初花)六十六條の中務宮云々陰陽道も醫師のかさもよろづもあさましきまでさらせ給へり作文和哥おとの方世まをぐきめでたうおひしまは(万)廿八心太良比よあで給ひ

とむ 溜矯。本語ナルベケレド多クタムルタメテトノミイヘリクムルノ所

たむ 壇(源夕霧)卅六どんこぢちてりへりいらん事のめいぢくかく

とむ 綏(同梅がえ)七たんのからくみのひもあどをまめかこうて

たむ 端(同わかあ)十六からの京の七大寺布四千九ん云々

補たむ 回(万)卅三「繩浦ゆをかひ見ゆるおきつーま榜回舟のつりせはらーも

同「武庫浦を榜たむ小舟粟島をそのひ見つゝともーき小舟(万)十三云々磯榜

回作(万)廿五榜多味行之多か一小舟

どんをち 檀越(三代實錄)七ノ為寺檀越枉法(翻譯名義集)一五稱檀越者即施也此人

行施越貧窮海(万)十六「檀をちやあかもかいひを氏戸等我課役おたらバあれるな

あらかん(後撰)賀年星行ふとて女檀越のもとよりせゝをかりて侍りまは

とむろ 屯。軍の陣取する所をいふ

たむる(周禮疏)曲者以火炙之木則濡可揉使直撓屈也或作撓正字通撓撓古互通

史記平津侯傳橋同矢累弦(後拾)雜五「とちのくのあたちのま弓君よこそ思ひ

とめさる事のとらめ(六帖)五ノ「とちのくのあたちのまゆとむれども心おそ

さよやまぢざりける(散木)中五。かへると「つくくとと思ひとむまばとつか弓か

へるうらとせつるもへてをる思ひたむる溜(拾玉)四「人あゝる神たがハま

の竹のゆがまんかさをとめてとよか(夫)卅三「志のためて雀弓をるとのわらそ

ひたひゑぞいのそけあるかな補(風雅)戀三三條院「おれやさいあどちのまゆと

今こそいおもひためたる事もかたらめ(同)雜上よ「梓弓ためらふるとに月影の

いるをのと見てかへりぬるかあ

たむる(後拾)春上大(風体)五「梅のかをよそ此あらーの吹とめてまれの板戸のあ

くるまちけり(順)廿「あきたむるかまごの袖よみつーのひるまよたにもあひ見

てーが(夫)九為家「水たむる春の山田よながれきていほーろたへよちるさくら哉

後(秋中よみ)八しらす「朝ごとよおく露をぞけうたためて世のうきときれかきたよぞかる

夫(三)定家「山人のゆくてのわらび手よとめて志をそぞやむ岩のそとり(六帖)

上六「色ふかき露のりぎりとたむまきも紫ふりき秋の花かな補(拾遺)春よみ人「つ

とむるおとのかたきうぐひその聲をる野べのわりあゝりけ(山家)上「をー



ふは萩咲のべの夕露とをさしもさめぬ萩の上風

附さまる(應神紀)六瀬豆多摩蘆塚佐瀬能伊戒珥(風雅)冬内大臣「霜あゆるのべのさ

さ原風さえてさまりもあへせふるあられ哉(万)十六とづさまる池田のあそが云々

(同)十三とちかを劍のいれのさちれをよたまれる木のゆくへかま(いせ集)四十

「つの國のさつの堀江は雨降ハ限もあらせさまるわが戀(後)秋中「衣手のさむく

もあらねど月かたをさすらぬ秋の雪とあそこれ(堀初)若菜「野べよいで、春の日

つめどさすらぬはまどうらわさわかあゝりけを(源末つむ)廿髪云々うちれの

そそにさまりてひかれさるぞど一尺さうりあまりたらんとみゆ(狭)三ノ下御ぐい

の云々御ぞのそよもたまりゆきたるをそのそぎをるを云々

附たまりみづ(夫)廿六「ゆくたもあき山の井はちる花のたまり水ともかりに

るかあ

附たまら本ノ意ハ同シケレドモタレヌ心也宇治拾九六越前敦賀此女を我あ

らんをりこのもしく見おかんとて男あいせけきと男もさすらざりけきこれや

これやと四五人までいあせせけきとも猶さすらざりけきわびて後にいあいせ

ざりけり

さんざい探題散木上十八おあト殿下よて探題のうさよませ給ひけるは櫻をとりて

よめる

三むどく(万)六ノ長哥云々さいらなくわきいあそむ手抱而わきいまさむ云

(三部抄)てをさんざきてゆるくさる

どんか檀那翻譯名義集四ノ秦言布施若内有信心外有福田有財物三事和合心生捨

法能破慳貪是爲檀那云々宇治拾三ノ佛師どもどんかを失ひて空をあふぎて(つ

れく)五一段法師の無下に能あき檀那をさまどく思ふべし

さむらのおんとさ(古)雜田むらの御時に女さうのさふらひよて云々

さむらのおんとさ田村文徳天皇ヲ申奉年代略記天安二年八月廿七日乙卯崩於冷泉院九

月六日葬田村山陵号田村帝

さんるん探韻源花のえん初御子さち上達めよりとめて其道のハ皆探題給はり

てふみ作り給ふ宰相中將春といふ文字給はきりとの給ふ聲さへ例の人よことあり

たむく手向神ニモ佛ニモ山家下「そがのねのがく物をばおもととたむけ

し神よいのりし物を(夫)十五「立田山神のさけしよさむくとやくれゆく秋のよ

さおるらん(同)八慈鎮「住吉の神もまつとやおのがねをさむけてさぐる郭公哉(古)



秋下かね「立田山たむくる神のあれバこそ秋のまのそのぬさとちるらめ(撰集抄) みの王 九 観音堂にまゐりて法施おと手向侍りて(補)新古(雑上)「老ぬとも又もあそんと行 年よかまごの玉とたむけつるかか(美濃家裏)下句旅行人よ手向の物をおくる意よ てよまれたるあるべしされどそれゆへ手向の神にさむくべき料よ贈るよあ をあれその旅行人よおくるよのあらざるを此歌の行年よさむくるといへるたがへ り(尾張家苞)さむけつるかかいたむけつるるな也此歌のまぎらそけきとあは かくもよむべきにこそ其例引勘べし旅へゆく人よ物を贈ると手向をといふ夕かは の巻よいよの介神無月ついたちらに下る女房の下らんにとてさむけことにせさせ給 ふと有道々の神よ手向の物と贈るよりうつりて何にもあれ旅へ行人よ贈る物 をたむけといふ也(美)又神よ手向るよ准へて年へたむくといへるからバゆくとい ふ言よのあひせ(尾)さる事也旅行人よ准へる也神よ准へるよのあらせ一首の 意老人よの成されども又も逢ませうとて泪の玉を餞別よしたと也

さむけ 手向。體ノ(万)廿六「周防あるいと國山をこえん日手向よくせよあらき その道(同)廿三「さは過てかられ手向よおくぬさの(土佐日記)おさくるみちに手 向する所ありかちとりてぬさたいまつらるよ(古)羈「たむけよいつりの袖

もさるべきよもみぢよある神やかへさん(夫)卅(現)六 知家 「とむろ山と布つ宮の 神さびて風のと花のたむけとぞる(續千)人の國に「おくれトといそぬ泪も 手向よいとめかねつる物よぞありける(同)「君がさめ祈てたてるから衣別の袖 やたむけあるらん

たむけ 峠(万)十五「かこみとのらぎありしをこころぢの多武氣よさちていもが かのりつたむけのな坂をあらたむけといひ逢阪山を手向山 契沖云さる所をた うたといふのも手向山あるべしといへり

さむけ 手向。饞ハナム(後)別「あた人のさむれをれる櫻花あふ坂までいちらせ もあらさん(源夕顔)五十 伊豫介神無月のついたら頃よ下る女房の下らんよとてた むは心よとよせさせ給ふ(後撰)別「秋ふかく旅行人の手向よのちよまさるぬ さかかりりりコレヲモオホカ(拾愚)上「都いで、朝たつ山のさむけより露おき とめぬ秋風ぞふく

とむれのもの(和名)二ノ道神、唐韻云禰音觴和名太無道上祭一云道神(三代實錄)卅 元慶二年五月八日授越中國正六位上手向神從五位下(万)十七ノとみ山たむれの 神にぬさまつり(いせ集)物へゆく人にか「けづりよし心もゆるく玉かづらさむけ







相似をタウバレリと點したるをひりり可(源柳)四十宮の御たうさりよても必あるべき加階ををたよせせ同に四ふ宮)六御さうさり此加かいををさへいづまの心もとをたよかいをぎ加へておとをびさせ給ふ同をとめ)五御たうさりのつかさあうふり何くれの事よふれつ(大和物)一正月の加階さうはりのこといとゆかいうおやえけれど

さうをらん賜ハラたぶの所へさうべ賜へ又食スたぶのたうべり給へりさぶの

たうぢやう道場(右京大夫集)四おとしまし御方をたうぢやうよあつらひをさり

いもあそれにて

さうり道理。道理ノ文字韓非子又(源 柏木)十四朱雀ノ心おくれさきさつ道理のま(佛書)モモミユカリ女三ノ一チ

まからで別れをバ(狹)二ノ下卅一大將ささりりあかぬ事をく何事も是こそ道理のまのかぎりある人の御ありさまをめまど云々(うつは 嵯峨院)二さしがに道理

失ひ給をささかしくおとれる人おれば云々(源 桐つぼ)九此御事よふれさることを

たうりをもういおせ給ひ同とさ卅世の道理と思ひとりてうらみざりけ

る同若紫)卅世間のたうりおれどりおいび思ひ給ふる(宇治拾)八ノ十敏行冥此さ

びいたうりよてめさるべきさびよあらねども此うれへよよりてめさるかり

さふる(源 さかさ)五心をきわざとり貫之のいさめさふる、かたよてむづりいれまばとぐめつ〇注は戯なりと云り或ハ倒也といへり未詳

さうか踏歌(源柳)四十内宴たうかかと聞給ふよも(注)女さうかハ毎年正月十六日

ニアル也男たうりの正月十四十五あり毎年のあ(年中行事哥合)真一このとの

の聲さへをめる雲るかかさのわたのろき月夜(源 まさ)桂七男さうかあり

れれど補(おもひのまの日記)後普光園掃おといかんさう哥おこなはるべいとさ

あえいを

たうざい當代(源あかし)廿たうたいのみまい(同)をつくしハさうざいのりく位

よ叶ひぬることと思ひのおとれくおや(同)玉高廿たうざいの御母后と聞え

いと此姫君の御かたちををかん(同)東や五十たうざいの御かいづき娘をえ奉り給

へらん人の(狹)一上一條院さうざいおどの一ささい腹の二の御子ぞか

さうぞく沙門と俗人(後撰)旅詞云々さうぞくに哥よませ給うける僧正哥云々

さうつぎて統繼(うつや 俊蔭)下七此聲もさうつぎてからひ來ればつかくやハ

らのかる物のいとめづらりよおも白(同)同六仲忠御門春宮も片時まりでさせせ

召つかいせ給ふ琴のさる世の一あれたふくよせねとことあそびを〇統ハ



トウよてその統緒と繼たるからんかさらば<sup>レ</sup>の部をへく又くうつきでの誤か

たうらいのどう<sup>一</sup> 當來(源夕かほ)廿をもたうらいのたう<sup>一</sup>とぞをがむなる(細流)

金剛藏王の過去釋迦現世觀音當來彌勒あり

**補** たうやく 膏藥(紫日記)ふやのそかせさかしたちさいらさるとりさうやく、それ

る例のことぐもかり

たうけ 峠(堀太)山内 一足柄の山の峠よけふきてぞふトの高根のそとをらる、<sup>訓</sup>此

未詳宣長ハタムケノ音便 ナリト云姑クコレニ從フ

たうぶ 給フ敬。又オノレガ上。食スルヲ賜フトモ 出ス **補** たうび (大和物)

百五十深き山よきてさうびよとのとせめければせめられわびて○文雄云賜へよの

音便也みづのらのうへよのみいふ語也

たうこく 當國(源玉かつら)廿當國の受領の北方よなり奉らん

たうめ (古事記)上、四、汝者雖有手弱女與伊牟迦布神面勝神故專汝往將問者云(和名)

七 專日本紀私記云專領二字讀多字女今按專訓毛波專一之義也太字女者毛波良之古

語也今呼老女爲太字女故次於負耳(土佐日記)翁人ひとりさうめひとり(同)下、淡路

のさうめといふ人のよめる哥(うつろ 藤原の君)をのとりさうめ 按ニ紀記トモニモ

ハ老女ノ訓也

さうめ コレハ狐ノ名ニ云リ但(宇治拾)ノ狐ノ自ラ子ニ(百鍊抄)九後三條延久四年十

二月藤原仲季勤罪名配流土佐國於齋宮邊射殺白專女也(新猿樂記)一野干坂伊賀專

之男祭叩蛇苦本舞稻荷山阿小町之愛法馳鯉破前喜(源東や)五十七 弁尼詞 ふりそへさか

らめきて心あらひのやうと思それ侍らんも今更まいがさうめまやとつ、まゝくて

かんどきまゆ(宇治拾)四ノ一紙さまひりてこれつゝとてまかりてたうめや子供な

どよくせせんといひけまバ

さうと 當時。サツアタリタル(源東や)十當時の帝をかめぐと申給ふかれバ(宇治

拾)五ノ十段。故主ノ從者何事も申せまさひとへたのとてあらんぞるぞまづ當

時さむけかり此衣きよとて

どうい 導師(古)戀をもつづも寺よ人の業しける日真西法師の導師よていへりけ

る詞を哥よよとて云々(源藤のうらは) 三くこん佛ゐて奉りて御導師おそく参り

れバ(同) 三御佛名も云々 導師のまかつるぞおまへにめして盃をと常の作法より

もさしこりせ給ひてあとよろくなど給は

どういん 道心(源すゝむし)十其人まねよきふ御道心のかへりてひがく、う(榮



花山)一後少將のをさなくよりいみとう道心おそして法花經をあけくれよと奉りて(枕)十七又貴き事道心おそかりとて説經をといふ所にさいをよいきぬる人こそ云(源橋姫)十我身にうれへあるときかべての世もうらめしう思ひしるをトめありておん道心も起るをさかめるを(枕)十三虫のぬかづき虫又哀を也さる心は道心おそしてつきありくらん(榮花山)廿世の中の人のいとく道心おこして尼法師よりおそてぬとのを聞ゆ(源浮舟)十此人のあまり道心よすゝとて山寺よよるさへともおれはとまり給なる(夫)廿加茂社 哥合慈鎮 一よとおほつおくりむるふる年のくれいたゞ道心の有まぞありける

さうらのくらうご 黨使の(うつろ 祭の使)九さうらのくら人をさしよをそておりてぶとうして

さうしき だつサキを誤た(榮初花)卅御中とのるのときとぞあり 云々火ともして宮の志もべともみどりの衣の上にしろきたうしきともよてみぬまゐる 云々

とる 田井(夫)十四私安元年 田圃定法師 一まくせ原たましく田るの秋風よよせては波のまさりへるらん(夫)卅(新六)五衣笠 内大臣 一山賤の志づのあさぎぬをいぶつき草とるさるまたぬ日のか(同)七(堀太)顯 一わきもこがをそこの田るよ引つきてたこのてまかく

とる早苗かな(補)万)九ノ 一おほくられ入江とよむかりいめ人のふしみぐ田井よりりわたるら(同)十九 一朝霧のたなびくさるよかくのりをとゞめえんりもこがやどのそぎ(同)廿四 一まはらをとおもへるものをたちそきてかよその田るにせりぞつみつる(同)十九 四 一おそきまの神にませば赤駒のはらそふ田るをみやことかいつ(同)十五 一たづがねのきこゆる田井よいりしてこれ旅かりといもにつけこそ(同)九ノ 廿三 せをちる師付の田井よかりがねも寒くきをたぬ(同)つくさねのをその田井よ秋田かる(同)十五 一春りそきたびく田るにいりして秋田かるまでおもそしむらく 田井の考石原正明年々隨筆あり

たのむ 田居(今昔)卅ノ 農業の爲よ牛を飼 云々 秋ころ田るよ放たりけることを云々 其牛子をぐして田るに喰行けるよ

たのむ 頼也(源夕かほ)十今年こそかりそひにも頼む所をくかく(後拾)二男のまてといひおこせて侍りけるかへりことよよみ侍りける 相摸 一このむるをたのむべきよのあらねどもまつといかくてまたれもやせむ(源帚木)廿えんよこのましきあとに目よつかぬ所あるよ打たのむべくもええぞ(古)秋下 一侘人のわきてさちよる木のもとこのむ蔭なく紅葉ちりぬを(源若菜)上 誰をたのむかたよて物し給さんと



すらん(後拾)一戀「このむるよ命の、ぶるものからを千とせもかくてあらんとぞおもふ(枕)七ノ人のおぞく合せしる所よかたくなのあらでさやうの事らうらうかりけるが左の一番のおのまいたんさ思ひ給へあどたのむるよさりとむわろき事のいひ出とえり定るに(源 総角)九ノ「きりり」を思ひ出るもそかなきを  
 行をゑかいて何たれむらん案ルニ人ヨリ我ニ其人ヲダノ思ハシムル也宣長云ヲリ玉ヲ云也スベ(古)五戀「山城の淀のこかでもかりよごぬ人たのむ我ぞか  
 つかは)十打とぬべく見えしさまあるをこのにて(落窪)一たらひをさふの死よ  
 けからんもあそいたまのらんとりあつめていとかならいたけきそたのときこえ  
 させるまよとてやりつ(源 桐つは)四かよき御かけをわたのときあえながら  
 (瀆松)二ノそよ何事も今よりおほしそぐめよろづ頼を聞えてあるべきを(宇  
 治拾)五何事も申せ又ひとへ頼みてあらんぞるぞ云々(源 あかし)廿住吉の神を  
 のとそとめ奉りて(同 橋姫)初かよよ又かくこのとかそいたまへり(伊勢物)十八  
 「年ごよも十とて四つへよはるるをいくとび君をこのと來ぬらん(源 はたる)廿さ  
 ありぬべきあよりよのそりかよとも宣ひふる、いあれさこのとかくべくもあ

させ(同 竹川)廿かうこのとら、らせかりぬるぞおもひをさき給ふおとりぎりか  
 (同 帚木)廿まめ人よこのまれぬべけれとおぞ物から(同 わかあ)上ノまいてひ  
 とへまたのまれ奉るべき筋よむつひあき聞えんおといと中く(同 みゆき)廿さ  
 もとけし給えらまろ侍り、此女御殿あおのづからつたへ聞えさせ給  
 ひてんとたのみふくれてあんさふらひつるを(同 あさかは)十今たのむあとお  
 ほしのたまふも(万)四ノ大船のこのめる時(拾)戀よ人「あがれてとたのむるよ  
 りの山川のこひしきせよわたりやせぬ(小大君)「を、からぬいのちわれも  
 ゆづりてんたのむることをされよせま(源 朝顔)廿うちたのみきこえて(伊勢  
 物)九十一「わがたのむ君がためよとをるをわいと死しもわかぬものよぞありける  
 附このと 体語(源 末つむ)十物あひそといぬこのと(好忠)四方の「何もせで  
 わかきこのとにへ、と身い、づらよ老ぞよける(源 まつらせ)十「あそら  
 トと契りしことをこのとよて松のひまきよねをへ、かか(同 きりつは)三かたト  
 けあき御心をへたぐひあきこのとにてまドラひ給ふ(同 は、き、)四十あり  
 かがらの身よて、御心をへをま、あるまトき我たれにて(同 竹川)廿  
 哀何をたのみよていきたらん(同 タかや)一十年比のたのとうかひて心ぞをくお



もふらん(同 わかあ) 卅 此笛吹事も又いとをさな夕にて柏子と、のへんたのみつ  
よりらとと笑ひ給ひて(同 みのり) 三 後の世よりおあト蓮の座をわけんと契りかた  
しきこえ給ひてとのみをか給ふ御中かれと(同 よもきふ) 十 猶かくりけをかれて  
ひさしうかり給ひぬる人よとのみをかけ給ふ(散木) 卅 釋教中心みざらせしてたれを  
をかくまばりからせ極樂に生るといへることとよめる「その國を忘のおもぢぢり  
とよかくまねがふまゝろのみされぢもが夫(夫) 廿二 建長八藤「忘るゝあればよ  
たの森のゆふたを泥ちかきよいとゞりへるとの(源 末つひ) 廿 三りくとのとをく  
てもそぐる物ありとぞ

附たのみどころ(信明) 卅 「世の中のとのと所よせし物をせせとかくややうんと  
思ひ(源 は、き) 二 ついのとのと所にいおもひおくべかりけと(同 うすくも) 八

たのと所をくからせ給ひよとる事とかけく人々おやかり

たのむのかり 田面ノ(いせ物) 十 「とよ野のとのむれ雁もひよふるよ君がかたに  
ぞよるとかくかる(千載) 春上 俊頼 「春くればとのむれかりも今のとてかへる雲路よお

もひ立ちり(夫) 十二 後 「とよの、里のあれよ秋の野よたれとたのむ乃初雁の  
おる(同) 二 「いかよせんよこれ、里の有明よたのむの雁の月よ鳴る

たのひ(榮 わかえ) 十 御靈會のはそ男のたのひしてかやかくしたること、ちさる

に(元眞) 六 建武行事) 六月朔日の條

たのめ 契云人ニ頼マシムルトイフ心也。アラテニサセルタノミニサセルタノマ (伊勢)

廿(續古) 戀 「まつかけてとのめしこといなけはとも浪のこゆるいおやぞりあしき

元輔(夫) 廿 「最上川たのめ舟のつきなくてつあくこぎとかれぬる行さぢも

みん(貫之) 廿 「ふる雪や花と咲ていのめけんかどかわが身のなりがてよさる

後(戀) 女よ年とへて心ざしあるよしをの給ひよさりける女猶まどしとたよ待くら

せとたのめなるを云々(後拾) 戀 三たのめたるわらひのひ 「たのめしをまつに日り

せのそぎぬればよまの緒よととえぬべきか(貫之) 上 九 「昔いかよたのめたれ

さか藤をこの松よしもをかかりそめけん(伊勢) 二 「わさつととのめしこと

あせぬきば我ぞわが身のうらをうらむる(後拾) 雜 一 「かやざりの空たのめせで哀

にもまつよかからせいづる月か(患見) 八 「いくそさび春のさくらにこりぬらん

忘さしの色よとのめられつ(枕) 六 三ノ何の心ありてあはひひのきとつと、んあぢ

死かきかねとたりや誰よとのめさるよかあらんとおもふおあまほしうを(後拾) 戀 二 人のたのめてこせ侍りければつとめてつかさしる 和泉 式部 「お泥ががらあ



かいつるかかともねせぬ鴨の上毛の霜からなくは(同) 同中の關白少將に侍りたる  
 時さらからかる人は物いひわたり侍りけりたのめてこざりけるつとめて女よあそ  
 りてよめる「やさらもでねあまし物を云々(源夕顔)廿 此世のよからぬ契りあどま  
 でのめ給ふに(同あかし) 十四 此ねたがとぬさけよりをあらせあひえんとたのめ給ふ  
 めり(同 溲標) 十 さらあがめそとこのめさこえ給ひし折のまとももの給ひ出て(同 明  
 石) 卅 九。の九かたみにどの給ふ女 一「あやざりまたのめおくめるひとことをつれせぬ  
 ねまやかたて忍さん(狭) 十二上 一「若よりへりまつ命ぞたえぬべきあかしく何また  
 のめそめれん(源は、さ、ハ) 廿 五 心くるしかりしかたのめわさることなどもありき  
 か(大和物) 一「あざ人のこのめさとりしめかその色のふかさやみでや、をかん  
 (頼政) 下、あよひのかから来たとたのめつかひしりしりへりてと詞のかくて  
 (玉葉) 戀二 爲兼 一「人もつゝとわきもかさねてとひがたをたのめしよまゝたゞふけぞめ  
 く(古) 別 一「りつあえてわりれもゆくかあふ坂のひととのめある名よあそありけれ  
 (千載) 別 一「かへりこんををばいつといひおかど定めかき身の人のめあり(山  
 家) 下「紅葉まゝかの、岑のよあざりたのめぬ人のまさるゝやあぞ(後拾) 戀一 能宣  
 「さてといひし秋もあかさをかりぬるとたのめか置しつゆにいりよぞ(新勅) 戀二 家長

「いづづらよいくと波のこえぬらんよれめかおきし末の松山(枕) 卅四 一はドめ  
 よりあがくいひつゝこのめせのかゝるおもひよあまし物

たのこ 田實。頼ムコカケテコレ (古) 物名 一「後まきのおくれておふる苗かれあた  
 まいからぬこのとぞきく(同) 戀五 小町 一「秋風よあふこのとこそりあしれわが身む  
 かしくかりぬと思へば(好忠) 七月 中 一「その上よいは種をまけりせば秋のこのと  
 をよそよましや

この一 樂(万) 九ノ夏草のなぐくあれせけふのたのしき(同) 五ノ梅を折つゝとぬ  
 一さどへめ(夫) 廿五 顯昭 一「をへらきの御代長濱舟出してこのしきこゑようたふ蟹人

(同) 卅一家 集兼盛 一「きみが代をまらしもなるくおそくらの里のかがぢをみるがさけしき  
 (拾) 神樂 一「さゞ波のかがらの山乃かがらへてこのしかるべき君り御代哉(玉葉) 賀

俊 成 一「ゆふその、日りのりづらかざしめてこのしくもあるり豊のありりの(補) (万)  
 十九、 一「春のうちのたぬしきをへば梅花手折もちつゝあそぶよあるべし(兼盛) 一「ま

ねかねとあまたの人のをたくりあそといふものぞこのしかりける(古) 二十、おほ  
 歌 一「あさらしき年のとどめまかくしこそ千とせをかねてこのしきをへめ(續古) 賀

定家 一「君をいのるはふのたふとさかくしこそをさまれる世のこのしきをつめ 廣足  
 云こ



いへめをつめと誤たるをそのまゝとりてよまれたる也

たのしむ 樂

たのしむ 同、体ノ(夫)十七喜多院入「このしみやさうらの池にふかゝらん玉藻にあ

そぶるものむら鳥(同) 卅六述懐後「このしみよあけさいかけとそぶ物と世にあふ

そどのあたる人やあき

たのもし(山家)下「いりばりり君おもひまゝ道はいらでたのもしからぬ別ありせ

ば(源ゆふかは) 廿九法師あどとまそわかゝるかたのこのもしきものよのおぞまべけ

れさ(狭) 二ノ上池の水もみくさるて昔のよげもとまらぬ蛙の聲をりたのもし

さなるべよて云々(源わかあ) 上ノ四いわけあきよそひよてたゞ一人とたのもしきも

のとからひて(同若紫) 四十九たのもしき筋をがらも(同夕顔)四十ものをかあや物

給ひ一人の御心をたのもしき人よて(同總角) 十六大たのもしき人なくて世とを

そ身の心うきを 是の父母をいへり(源手習)六たのもしういりきさまを人に見せんと思て

(新千) 雜中師重「若草の末たのもしき陰ぞとも庭のをへせしる人ぞしる

たのもし(元真) 廿四「さゝがよのいかにせよとか我戀のこのもしきあきそらよ

のふる(源わかあ) 卅九いれとまるまどきこちそれとのたまふもこのもしけな

(同は、き、) 廿四わそれぬよそがと思う給へんよたたのもし(同) 四十九たのも

し(同) 廿七これかんえたもつまどくたのもし(同) 廿七たなき方あり

る(同) 廿三行さきもいとこのもしき事とおぞさためて(玉葉) 雜一「風

そよぐ萩のうのその露よりもたのもし(同) 廿三あき世とこのむかを(神代紀) 上卅女所行

甚無頼 續後拾 戀二「あひえんと思ふ心を命よていける我身のたのもし(同) 廿三あき

たのもし(源わかあ) 卅三たのもし所よこもりて物し侍るあり

たのもし(源玉かつら) 十豊後のそけといふこのもし(同) 七此このもし人

かるそと(同) 卅八そかあかの御このもし(同) 廿八見給ひてめし出さり(枕) 十三初

瀨よまうで、云々 このもし(同) 廿八宿坊ハ万事タノ

たのもし(田面) 卅一山もとの竹よりおくよ家居して田の面をかよふ道の一をぢ

(風雅) 春下四條「山川をわいろ水よまりそれたのもしようけて花ぞあがる、(夫) 廿二

中務卿 「さなへとるあべの田のものむらさめよさかこえておくそと、ぎんか

(夫) 廿二定家「あらしくおくこのものそくさあけりつ、よのいとあみのそりや過うき







